

のまゝ捨て、置けば、どうしても貴君ア十四五人の女に包圍攻撃さるべき煩悶病者に出来て居ますぜ、まだ症の軽い今の内だから、従うて療治も仕易い」

語り終りて目を閉ぢ腕を組みつゝ、椅子もろとも後へ倒れんばかり身を反せば、おもはず我を忘れて引き付けらるゝ色男、首を前に差伸べながら、暫し無言の其髻面を打ち守りぬ、

煩悶病院の先登第一の患者、院長の注文に應じて女二人に一人の色男、ハイカラ首を前に突き出しコスメチツクと香水の匂ひに四邊を薫して、鋸の目立に等しく癩走りし神経質の聲、

「先生、人間の快樂といふものは、やはり程度論でせうね」

大島院長、おもはず満面の微笑、

「面白い、つまり世の中の人間が珠玉の如く求めて快樂とする點も、今日の貴君に取っては寧ろ一種の煩悶病で、あまり其快樂の度が過ぎて却つて苦しいといふ理由でせう、して見ると兩手に花といふ諺は、實際いまだ二人の女に惚れられた事のない奴から出た羨望的の怨言ですな、はゝゝゝとところで、どういふ工合に苦しいか、多少は堪忍しますが、なるべく恍惚をヌキにして只その要點だけを聞きませう」

「は、實は、かういふ理由で御坐います、私の家は」

「いや當院に於ては別段、族籍姓名その他の身分上を委しく立入つて聞くに及びません、大體この煩悶病は多くの場合、家庭の祕密に深く關聯しますから、よくくの必要以外、偽名でも何でも構はん、つまり家と人との無用の責任を持たせず、たゞ煩悶の病源たる事件にさへ、嘘がなければ宜しい」

「實に御注意の届いたもので御坐いますな、さうなると萬事に差支なく、何も彼も安

心して猶更ら露骨に打ち明けますが、その二人の女といふ一人は今度十九歳になる或大紳士の令嬢で、一人は新橋の嬌名の高い藝妓」

「ちよいと、お待ちなさい、さる令嬢は宜いが、先刻も申した通り金銭上で自由になる女、即ち藝妓は藝妓それ自身の煩悶に關する外、客の方からの藝妓を戀の部には入れませんぞ」

「いや先生、なるほど他に對してこそ金銭上の藝妓ですが、私一人に對しては、決して先生、誓うて先生、斷じて、さういふ女ではありません、どういふものか彼の私に對する時は、寧ろ深窓の處女よりも可憐な稚氣を帯びて居ります」

「は、ア他に向うては兎も角、貴君だけには金の外で惚れたといふんですな、いはゆる貴君は利慾外の情夫なるものですな、本人の證明、間違ひありますまい、は、は、は、よろしい、ぢやア特別を以て戀の部に入れませう」

「是非、入れて戴かないと去年以來の彼が情に濟みません、ところで、其女は二十一になります」

「令嬢が十九、その藝妓が二十一、時に貴君は雙方、どツちに愛を多く傾けて居ます、また雙方どツちが早く關係しました」

「そこで先生、藝妓は去年の春で、令嬢に今年の夏、戀の成立には殆ど一年半も前後して居りますが、戀の程度分量に於ては雙方ともに負けず劣らず獻身的ですから困りますよ、いづれかの一方に多いとか少いとか、輕重厚薄の差があれば先生、かうも煩悶しませんが、實に極端と極端、加之も雙方こゝ三個月箇に結婚の式を擧げてくれと迫られて居ります」

「なるほど、そりやア困りましたな、時に、その令嬢と、その藝妓と、互に知ッて居るんですか、つまり逢はなくツても蔭ながら互の事情を知ッて競走するんですか」

「無論、残酷な理由ですから、あくまで秘して居つたのを、私の友人で内々そつと雙方へ通じた奴が有りましたから、今では雙方ともに殆ど死物狂ひです」

「死物狂ひとは、ひどい勢力ですな、よろしい、五分間お黙りなさい、その間に於ける貴君の煩悶病を拭ふが如くに療治してあげませう、なアに、これくらゐの煩悶は實際、わざわざ室内で治療するほどの価値もない、當院の門前で二三度きりく舞すれば、すぐに癒りますが、開院早々だから手にかけてあげます」

大島院長、暫らく閉ぢたる眼を目鏡越しに光らして、女二人に一人といふハイカラ男の顔を射るが如く、ぎろりと打ち守りぬ、

「さアこれから療治にかゝります」

「は、どうか、よろしく」

「全體、貴君ア生きて居ますか、死んで居ますか」

「こりやア酷い、殆ど侮辱だ、しゝ失敬な、いくら何でも僕は」

「なアに、身體は自由に動いて息の無事に通つて居る事は現在わかつて居ますがね、生理的の外に人間として人間らしく生きて居なさるかといふんだ、つまり世の中に對する自營上の活動、如何を尋ねるんです、早く話せば當世風に見苦しからぬ寧ろ立派に貴君の赤裸々を纏つてる洋服なりネクタイなりダイヤモンドの指環なり其他一切の粧飾物は、貴君が誰の世話にもならず自身の腕から働いて出したか、但し寢て居て知らぬ間に親の慈愛で出来たものか、或は拾つたものか盗んだものかといふ事です」

「折角ですが、さういふ事を聞かれに來たんでないから、いづれまた、今日は此まゝ歸ります」

「いや、歸さない」

「歸さない、どうして、どうして歸さないんです」

「此奴、怪しからん事をいふぞ、今日あれほど門前に押し詰めて、わつくくと騒ぐ中から只一人特別の選に預つて開院早々第一番の療治を受けながら、有難いとも思はず今この場で氣儘に歸るとは何事だ、輕症の患者と思つたが此奴、こりやア案外よほど脳味噌に變化を及ぼして重くなつてゐるわい、もはや精神的の注射法で無効だ、この上は鐵拳の荒療治で身體を痛めてかゝるより外に道がない、無論、負傷は付けません、柔道に於ては諸流の免許以上、悉く得て來てるから萬一、もし落ちても直ぐに活かす方はある、痛い事は痛い、生命に安心して堪忍なさい、まづ咽喉を絞め上げて置いて氣の遠くなる途端に五つ六つ腦天を喰はすんだ、さアよろしいか、覺悟は」

入口の扉は固く閉ぢたり三方は壁の中央に六尺近きブラシ髯の大男、ぬつと仁王立に立上れば、さらぬも當世風の象牙細工に似たる色男、はつと驚いて思はず椅子より滑り落ちし肩口を軽く叩きながら院長の笑ひ聲、

「は、は、は、どうです貴君、かういふ時でも女の事は思つて居ますか」

靜に手を取り慇懃に腰を抱へて元の椅子に押し据ゑながら、ますく、聲を和らけて満面の微笑、

「もし思つて居る、忘れて居ないとすれば二人のうち、どつちです、令嬢の方ですか、藝妓の方ですか、はつと驚いた刹那には二人とも念頭を去つたが偕また平氣になれば直ぐに思ひ出す、忘れられない、といふ次第ですかね、それならそれで雙方に義理も缺かず人情も失はず、加之も貴君の煩悶を去ると共に戀は戀で立派に遂げる療治の方法がある、は、は、は」

表裏活殺、擒縦自在、團子細工の如く掌上に丸められ、飴細工の如く指頭に捻ねられ、煙に巻かれし心地、馬鹿にせられし心地、ほつとして夢うつゝの心地を其まゝ慇懃に送り出されし色男、おもはず眉を擧めて振り返れば、大島院長ますく、満面の微笑、

「どうです、今日のところでは本人の貴君に取つて甚だ不得要領でせう、何をしに來たか、まるで五里霧中でせうが、それで療治の八九分は既に済んだのです、あとの一二分が佛像に於ける開眼式です、中間一日を隔て、明後日の朝、また入らつしやい、なアに今日明日の二日は二人の取愛い、女に幾何お恍惚なすつても大丈夫、それがため今日の八九分へ喰ひ込んで折角の療治を無にするやうな後戻りの恐れは、決して、斷じてない、却つて此二日が其二人に對する愛情の最終になるかも知れま

せんから、寧ろ遺憾なく力めて恍惚るだけ、恍惚の方が宜しい、無論、煩悶も思ふ存分、出來得るだけ煩悶なさいよ、は、は、は、いづれ明後日また」

いよく、わからず、ますく、ほつとして送り出されしハイカラの立去るや否、いつの間に入り込みしか四十一二の男、でツぷりと横太りに赤ら面の八字髭、羽織も着物も同じ大島紬を無雑作に重ねて、今しも院長の入らんとする背後より馨まで音太く呼び止めぬ、

「や、院長さん、ちよいと院長さん、お待ち下さい」

大島院長、おもはず立停りて振り返りぬ、

「貴君は」

「僥倖と申しては失禮ですが、どうか御目にかゝりたい」

「御用は」

「やはり煩悶病の件です」

「實は今日、案外の人數が一時に押し寄せて来て殆ど困つたくらるるですが、明朝あらためて諸君に徒勞をさせないやう、また當院の迷惑にならないやう相互のため、あらためて規則を張り出します、願はくは其規則を御覽の上で」

「いや、入院の患者では御坐いません、別の件で」

「は、ア、他の用ですか」

その男、靜に前後を見廻し、わざと面を突き出しながら、俄の小聲、

「實は院長さん、貴方を療治に來たものです」

大島院長、おもはずブラシ髯を逆撫にして目鏡越の眼光、例の射るが如くに光らせば、その男、ますます悠悠たる體、

「是非とも直接、内々そつと、院長さんを診察いたしたい」

煩悶患者かと思ひの外、煩悶病院の院長を診察しに來たといふ男、なるほど見れば容貌體格でツブりと赤く自然の血色を帯びて、どこやらに一曲ありけの面魂を備へぬ、院長さん、いかゞです、兎も角も一度この無禮者を應接所へ入れて御覽なさらなにか」

大島院長、靜に首肯きぬ、

「よろしい、おもしろい、どツちが診察するか、されるか、それは儲置いて、まアお

上りなさい」

「ありがたう」

「さ、此方へ、御案内します」

そのまゝ、後も見返らぬ院長の背後より、のそくと従ひ行きて、入口の扉を閉しながら

ら、テーブルを中間に差向ひぬ、

「やア御立派に出来ましたね、これまで出来すには、なか／＼お骨が折れました事でせう」

「なアに水の底から火を出した理由でなし、いはゞ當然、なくて叶はぬ今日の世の中に出來得べき事を出来ただけの事です、加之も隠れたる一大慈善家があつての業です、隠れず罷り出て働く奴は案外、樂なもんですよ、たいした骨も折れませんさ、もし骨が折れるといへば、これからでせう、兼て豫期した患者ばかりでなく、現に貴君のやうな不意打の道場破りも來ますからね、はゞはゞ」

「これは恐れ入る、しかし院長、さう皮肉に取られては困ります、實は煩悶病院といふ意味が、いかにも時代の要求に應じて今日の社會に、これ以上の適切なる緊急事業のない點に最も深い感謝と敬意を表して來たものです、ところが自分も亦この煩

悶といふ事に就いては多少、考量を持つて居りますから、幸ひ御目にかゝつて、御参考、と申しては甚だ失禮ですが、もし取るに足る點があれば、取つて戴かうと存じましてね、露骨にいへば今日この廣い無数の患者に院長たゞ御一人では、争はれぬ事實上、とても悉く療治し切れる筈がない、されば其煩悶者中、いかなる煩悶病を第一の急として救はるか、つまり世の中に數かぎりなき人間の煩悶を幾段ぐらゐの種類に分けて、其中どの部類を最も重き患者として收容されるか、それを伺ひに來たのです」

「はゞア、わかりました、まづ煩悶病の標準、定義ですな、かりに譬へて申さば、金と戀との煩悶に就いて今日の世態人情、いづれが重いか、軽いか、多いか少いか、といふやうな理由で、もし間違つて居れば院長の私を療治してやらうと、いふ次第でせう、はゞはゞこりや面白い、はゞはゞ」

大島院長、例のブラシ髯に左の掌を押當てながら、ぐツと逆撫にする時は斯人の癖として、必ず何等か自己の意見を發すべき表情の一端なり、

「さやう、別段、委しく数字的に煩悶の種類を精算しませんが、大體まづ六段ぐらゐに分けて居ります、第一に範圍の廣いものは、やはり金で、いはゆる今日の生活難事業失敗の借金その他の一切、この金のために常識を失つた奴です、第二は戀、これは四角な釘付の箱に押詰めて外へ手も足も出ないやうに及ぶか限の壓迫力を加へた昔でさへ、によろくと這ひ出して殆ど取扱ひに窮した難物を、今日は自由自在に開けツ放したのみか、或一部よりは自分の都合上、いはゞ商賣的の御世辭を並べて人間の本能とか自然の美とか、まるで神様を拜むやうに、いろくと讚辭を加へて獎勵するやうな工合だから、たまらない、あたら血氣の青年男女は悉く蒼白

き戀の犠牲物となつて醫學上の一大變化、其頭腦を解剖すれば、驚くべし戀の外に何物もない、しきりに體育々と叫びながら、事實は年々歳々に徴兵適齡者の骨格を輕節の如く削り行くといふ原因は皆この戀だ、加之も其戀に眞實なく精華なく實に馬鹿けたる小説的の戀で、つまり一の流行性を帯びた傳染病になつて居ります、第三は家庭の煩悶者、これは頗る内容の複雑したもので、さのみ外面に顯はれないが、顯はれないだけに最も人生の不幸を宿した慘澹の極だ、第四は要求の煩悶者、つまり一例が教育も人間も相應に出來て居て比較的また相應の地位を世の中に求めながら、その地位も職も得られない不平滿々の煩悶者で、一步を過れば失望落膽と自暴自棄の極、頗る社會上に危険の分子を含んで居る、第五は主義の煩悶者、これは前者と似て非なるもので、理に於て、聊か高尚幽玄の部に屬するが、自己が存在せる周圍の事々物々を非認して厭世悲哀の結果、つまり人間として人間界の奮闘

に堪へ得ざるもの、竟には精神に異状を來して自殺するものが多い、第六は夢幻的の煩悶者、生きてるか、死んでるか、わけの分らない奴、寝ても起きても入らざる無用の心配して、年が年中とりとめもない苦勞に家も身も磨り減らすといふ奴、實に罪のない、原因のない、漠とした、かはいさうな人間で、まづ當院に取扱ふべき煩悶病者を以上の六段に分けて居ますが、どんなものでせう、精細な分類は俵置いで大體上、この外に貴君の高説を伺ひたい」

「またもや例のブラシ髯を撫でて満面の笑を含めば、これに向ひし男もまた満面の笑を含みながら、軽く音なくテーブルの上を叩きぬ、

「や實に恐れ入りました、失禮ながら、いかにも私の考量と一致して居ります、ところで院長、その六種の内、いづれの煩悶者が最も療治し難いでせうか、どの煩悶を最も療治し易いものと思はれます」

「さやうね、まづ廣く多くて、事が卑近だから何でもないやうで其實、最も効果の擧げ易からぬ難治の患者は、さしあたり金に就いての煩悶者でせうよ」

「院長、甚だ突然ですが、その金の煩悶者だけ、その一部を私に託して下さるまいか、折も折、幸ひ金といふ事には實に時を得た適切緊急の年末に迫って患者の數も亦、必ず多い筈ですから、とても院長たゞ御一人では手が廻りますまい、つまり臨時の助手に御採用を願ひたい」

人事いよく、複雑の今日、殆ど際限なき煩悶病を大別して、第一は金、第二は戀、第三は家庭に於ける煩悶、第四は要求の煩悶、第五は主義の煩悶、第六は夢幻的の煩悶、まづ以上の六目として、その他の細節分類は臨機應變、時と人と事に随ふべしといふ大島院長の説に手を拍って椅子を進めし男、思はずテーブルの上に乗掛りて赤ら面

を差出しながら、自己みづから自己の身を薦めぬ、

「突然、まかり出まして名刺も差上げず、また今まで御尋問もないから申し上げませんでしたが、私は塚原要藏といふもので、この年齢になるまで家もなく妻子もなく仕事もなく心配もなく、たゞ僅に自分一人が食ふだけの財を持って水草を逐ふが如く方角も撰ばず、居所も定めず、いたるところ気の向いた宿屋を泊り歩いて年が年中、ぶら／＼と漂浪的の生涯を送る獨身者で、甚だ自畫自讚のやうに當りますが、事實この境涯になるまでの過去を語れば、なか／＼尋常一様の平凡なる人生を経て来たものではありません、わけて院長が煩悶の第一に置かれた金、そのものに就ては最も慘澹たる惡戰苦闘をして来たもので、凡そ金錢上の煩悶者に對うては、いかなる重患の療治でも、さのみ手に餘る様な事は無からうと信じて居りますから、どうか御採用を願ひたい、當分まづ御繁忙中の臨時傭に、如何でせう院長、いはゞ

人間裏面の決算報告、一年中の大油斷が今この時に押し寄せたりといふ十二月の狼

狽期ですから、とても院長お一人では叶ひますまい」

大島院長、微笑を漏らして首肯きぬ、

「兎も角も明日、まづ當分は金に就いての煩悶者だけを收容するといふ揭示を出す決心ですから貴君、こゝで其草稿を書いて見て下さい」

塚原要藏、懷中より手帳を取出し、さら／＼と鉛筆の走り書、

「これで、如何でせう」

「や、おもしろい」

「筆記試験ですな、及第しましたか」

「及第しました」

その翌日、煩悶病院の門前に一の揭示を張り出しぬ、

掲示

當院收容の患者は時節柄に應じ當分まづ左の通りに相定め候

金

金錢上に就いて世間あらゆる一切の煩悶者は如何なる難治の重患も其病症に依りて必ず救済の方法を相授け可申候

但し療治は金錢その物を與ふるの意味に無之候間この點に誤解なきやう豫め御承知下され度候

十二月

補院 助長 塚原 要藏 大島 逸平

金の世の中か、世の中の金か、いづれにせよ、この金といふ奴、ふしぎの魔力を備へて天下を我物と心得、萬物の靈長たる人間を馬鹿にして、神出鬼没、隱顯自在、これがために如何なる智者も才子も脳味噌を搔き亂され脚下を掬はれて、ふらくとなりぬ、

この生殺與奪の權を握り盛衰存亡の機を握める大怪物、金といふ奴めが、最も恐ろしき悪辣の手腕を振うて暴威を逞しうするは一年中の極月、うき世の總勘定、たゞさへ人間の常識を失ひ易き周章狼狽の時機に乗じて、寸隙もあらせず幕地に襲ひ來る残忍酷薄、肺病患者の胸板に鐵槌を喰はすが如し、平生は平生、もはや斯うなッては進退こゝに極りて義理も人情も顧みるに違なき其十二月、今更愚痴のやうなれど神も佛も頼み甲斐なき其金に就いて、世間あらゆる一切

の煩悶患者を療治すべしといへば、たとひ嘘でも夢でも、無價より廉いものなしと、金のため半殺しにせられし現世からなる半亡者ども、わツくと病院の門前へ押し寄せぬ、

その立騒ぐ亡者どもへ三百枚の番號札を與へ、その三百人中より今日は五十人を限りて、これを院内四箇所の患者控室へ分け入れぬ、

診察所には院長の大島逸平と俄の助手となりし塚原要藏の二人、差向ひながら聲を潜めて語りぬ、

「さアいよくこれからだ、塚原さん確乎と頼むよ」

「及ばずながら充分、腕に糾をかけてやります」

「どういふ奴に當るか、まづ試みに一番札の患者を君に渡さう」

「いや、兎も角も當院の體面上、また職責上、一番札は是非、院長の任にあるでせう、

二番札以下は如何なる重病の患者たりとも、決して辭しませんから」

「なるほど、さういへば、どうしても僕の任だな、ところで君、あらかじめ言ッて置きたいのは、その邊に脱落もあるまいが、酒色のためとか懶怠のためとか所謂自業自得、來るべき當然の結果で今なほ悔悟慚愧の念もなく、只これ現在一時の窮狀を訴へる奴は、いくら煩悶して居ても斷じて當院の患者中に加へないからね、さういふ不埒な奴は大喝一聲の下に叱り飛ばして掴み出すべしだ」

「いや、承知しました」

「ちやア、そろく始めよう」

嘘で固めた一年中の化の皮を今この時に剥がる、十二月、いよく人間丸裸の正體を現はして煩悶病院の控所に集まりし患者ども五十人、

されど同じ患者の中にも大小輕重の差別あり、類は友呼ぶ自然に分れて、その第一室は今日の番號札に人を搔き退けながら掴み取りし奴等、見れば容貌風俗いづれも貧乏神の溢團扇に叩き立てられて日夜の四苦八苦に青息吐息の重態、つまり逆さに吊つても鼻血の出ぬものばかり凡そ十七人、

「時に皆さん、かうして今日こゝへ集まつたも何かの御縁でせうが、お互に随分、困りましたなア、酷い歳暮ですなア」

「いや、もう、困りも、酷いも、とうに過ぎて仕舞つて、今ぢやア只、ほつとして居ますよ」

「借金は脊負つて立たれず置いて遁け、といふ川柳の通り、この上は夜遁けより他に智慧も工夫もないと思つて居ましたところが、かういふ有難い病院が出来ましたからね」

「なアに借金を置去に夜遁けの出来る時は、まだ宜いんですよ、私なんかア貧乏神に突き放されて死神に手を引かれてるんですからね」

「いや、死神に手を引かれるなア、まだ結構だ、全體、今の世の中に死んで申譯の立つものは戦争と情死の外アない筈だ、ところが僕は徴兵の不合格者で戦争には出られず、これといふ情死の相手になる女はなし、死ぬに死なれぬといふ境涯ですよ、あゝ死にたい、何とかして戦争と情死の外に心地よく死ぬ工夫はありませんかなア」

「は、は、は、それで人間普通の満足に生きてると思つてるから、さう死にたくなくなるんですよ、なアに實は我々、そろそろ去月頃から息を引取りかけてますぜ」

「その息の引取際に、どうか此病院で療治して貰ひたいもんですなア」

「療治して貰へる人は宜いが、この私なんかア、よほど重い病人だから、事に依ると見放されるかも知れない、もし見放されたら、どうしませう」

「折角の御相談だが、なか／＼他人事ぢやアありませんよ、この御本尊が危いからね」
をりしも入口より小使の呼び出す聲、

「さア療治が始まりますぜ、今日の一番札に當った人は診察所へ来て下さい、どの人
です一番札は」

いの一ばんに呼び出されし煩悶患者、いかなる人間かと見れば、この十二月に襟垢の黒
く光りし素衾一枚、ほろ／＼のシャツを肌はだに纏うて、地色の縞も目に見えぬ雙子織の
破れ羽織、幾年の空腹に纏ひしか繩の如くに糾れたる小倉帯、いふまでもなく浮世の
鉋かんなに五體の肉を削り落されて、残るは骨と皮ばかりの哀れさ、年輩は四十前後といふ
今が男をとこの分別盛りなれども、はや男も潰れて分別も盡き果てた死しに損そなひ一疋、ひよる
り悄然として患者の控所より立出でぬ、

「此方へ、此方ですよ、この室に院長さんが居られますから」

小使こつかひに導かれて、しほ／＼と差俯さしうつむきながら、踏む力の足音もなく入り来る體を、待ち
受けて椅子いすに倚る大島逸平、例のブラシ髻ひげを撫なでて目鏡越めがねこしの眼光がんくわうぎろりと物凄ものすごく光れ
ど、あくまで言葉は優しく打ち解けて微笑えみほを含みぬ、

「さア、おかけなさい、さう離れて、そこに立たって居ゐては困こまります、ずつとテーブル
の近く椅子を進めて、遠慮えんりよなくね、こゝは裁判所さいはんしょでもなければ執達吏しつたつりの役場やくばでもな
い、つまり貴君方あなたのためには冷ひやかな世間せけんと違ちがつて暖あたたかい慰安所ゐあんじょです、まア心易こころやすい朋
友だちか親類しんるいへでも來た氣きになつてね、は、は、は、時に貴君あなたは、どういふ身分みぶんの人ひとですか、
それだけは役所やくしょめくが必要ひつてい上じやう、仕方しかたがない、名は聞きくに及およばんが年齢としと職業しよくけいを、ま
た妻子さいしあるか、ないか、その點てんだけ」

悲かなしいか、嬉うれしいか、瘦やせこけたる頬骨ほぼねに涙なみだを流ながしながらテーブルの上うへに二三度ども額ひたひ

を擦り付けぬ、

「ありがたう御坐います、ありがたう御坐います」

「いや、禮をいふには及びません、今お尋ねした事は兎も角、まづ」

「はい、はい、どうか院長様、お救助を願ひます」

「なアに、事に依れば及ばずながら、お力になる事も出来るから立入ッて他人の秘密も聞くのです、だから萬事うちあけて、お話しなさい、だが、まづ今いふ身分上を」

「身分は、眞に、お恥づかしいもので、御覽の通り、かういふ風體を致して居ります」

「風體は、どうでも宜しい、つまり今日まで、何をして居ましたか」

「する事が御坐いませんから、何も致して居りません」

「しかし、食はずに今日まで生きて居れますまい」

「満足に三度、喰べた事は御坐いません、この二三箇月は一食で」

「一食でも生命は保てるが、その一食を、どうして求めました」

「はい」

「はいでは困る、日に一食でも、それを得て來た理由、いや何か得るに就いての業が

あるでせう、その業を聞きたい、随うて年齢もね、獨身ですか、妻子がありますか」

身體の榮養不足、もはや精神の朦朧に、何を問うても不得要領、流石の院長おもはず腕を組んで、そもくいの一番に聊か持て餘しの體なり、

いかに複雑なる事情ありとも、いかに煩悶の極に達するとも、その本人に多少の理解力さへあれば心機一轉これを導くの方法はあれど、そもくいの一番に當りし四十男、どこか押しても突いても何の手應なく、もはや身體の營養を缺き精神の異狀を來せる體に、流石の大島院長も聊か首を捻りぬ、

「貴君ア、よほど頭腦が悪くなつて居ますね」

「いえ別段、頭は痛くも何とも御坐いませんが、この五六年來、運が悪う御坐います」

「は、なるほど、運が悪いんですか、は、どういふ工合に、運が悪いのです」

「する事、なす事が皆、思ふやうに、まゐりませんで」

「する事、なす事とは、これまで全體どんな事をして、どんな事になりましたね」

「いろんな商賣を致しまして」

「いろんな商賣のうち、最も長く續いたのは何の商賣で、また最も短く廢したのは何の商賣です」

「はい長かつたのは乾物屋で」

「長くとは、何年ほど」

「五年いや四年でしたか三年でしたか、その邊は」

「は、わかりませんか、よろしい、長かつたのは乾物屋で、短かつたのは何商賣です」

「米屋を致しました」

「は、ア、長いにしろ短いにしろ乾物屋と米屋、金がなくては出来ない商賣だ、盛な頂上は、どれほどの金がありました、財産全部で」

「親譲りの地面や家作を交せて、私の二十二三までは確に七八萬、御坐いましたが」

「なるほど、貴君ア所謂る世間の若旦那なるものでしたね」

「へい、まア、そんな事で」

「今の貴君を四十二と見て、二十二三といへば殆ど二昔の前に於ける七八萬、なかなかの身代だ、尠くとも今日の二三十萬だ、つまるところ、昔は何の某で今は何」

もなしといふ結果です、は、は、若旦那時代には定めし、うるさく女に惚れられた事もあるでせうな、また以来、いろんな商賣も定めて、いろんな人に勧められたからでせう、これといふ自分に思ひ付いて自分に骨を折った商賣はありますまい、加之も今日となつては昔の惚れた女も、さんざ恩になつた奴も一人として、今の貴君を助けるものは無いでせう、たま／＼途中で出逢つても知らない顔をして行き過ぎるでせう、をり／＼苦し紛れに尋ねて往つても、十中の八九は木で鼻を括るやうでせう、貴君ア自分に悪い事をした覚えはないに何故、かうなつたかと、ふしぎに考へるでせう、親類縁者も最初の二度三度は世話をしてくれましたが、もはや心持よく寄せ付けてはくれず、失禮ながら、ほんやりの的もなく途上を歩いて居ても、し金でも落ちてないかと、拾ひたい氣になる事があるでせう、車夫となるには脚が利かず土方をするには力がなし、商店には備つてくれず會社には入れてくれず、ど

ツか景色の宜い氣樂な別荘の番人にもなりたいでせうね」
 「院長さん、お願いで御坐います、眞實で御坐います、何卒、さういふ別荘番に御取持を」
 「いや當院は周旋屋でないから、さういふ世話は出来ませんがね、貴君の頭腦に少々、腐つたところがありますから、その腐敗した點だけ切取つてあげませう、ますます、脳味噌は少くなるが腐敗部分を去れば自然、分量は減つても氣が直つて單純になるから結局、貴君のやうな人としては宜いだらう、第一その身體に營養を缺いて器が毀れて居る、一週間ばかり入院さしてあげませう」

世諺にいふ怪我の功名、いの一審札に當りし不得要領の四十男は、その不得要領が却つて僥倖の結果、まづ院長の手に掛りて入院を許され、二審札は助手の塚原要藏、い

かなる患者と待ち受けて見れば、さのみ見苦しからぬ風體に二十七八の血氣書生、呼び出された時は六七分まで盡きた紙卷莖を其まゝ捨てるも惜しく、入口の一口に吸ひ込んで苦しげの咳に咽びながら、残る煙を鼻の穴より吹き出しつゝ、無作法に入り來りぬ、

「二番札は僕です」

塚原要藏、じつと其顔を見詰めて、靜に首肯しながら、單刀直入に問ひ返しぬ、

「どういふ煩悶です」

「揭示に依つて來たモンですから無論、金です、金のため煩悶に堪へられん事が、ありまして」

「は、ア、つまり欲しい金が、思ふやうに出來ないからですね」

「まづ、さうです」

「容貌は兎も角も自然に馴致された風采態度、もとより君は商人でなし、また過去に於ても商業を目的として來た人間に見えないのみか、現在まだ家も妻子もないやうに見えるが、その君として全體その金に、どういふ必要を感じましたか、まさか故郷から學資を絶たれた、といふが如き單純な金ぢやアないんでせうね」

「よく的の中しました、學校は三年以前に或法學校を卒業して、實は二度も辯護士の試験を受けましたが不幸にして目的を達し得られない、それがために窮して單純なる衣食住の金が欲しい理由ぢやアないんです、食ふだけの事は目下、同郷の先輩で僕の阿爺が世話をした或高等官の許に居ますから、別に心配もないが、考へて見ると十年の苦學その功を成して今日の實際上、現に僕が辯護士の試験に及第したところで、社會より購はるゝ代價が、どれだけの人間になれます、曾て僕が少年時代の友達で、殆ど白痴瘋癲の如くに扱つた奴が株式仲買の小僧から身を起して、いまだ三

十にならざる昨今の境遇は、馬車に乗って別荘を持って世間より立派な紳士待遇を受けて居ます、加之も其奴の吐す事が、をり／＼新聞や雑誌に掲載されて實業界に於ける有力の一議論となつてゐるから堪らない、實に馬鹿々々しい世の中ぢやアありませんか、しかし事實は事實に依つて争はれぬ結果は結果、つまり今日の世の中は金です、金です、學問も智慧も人格も一切不用だ、寧ろ處世上の害です、たゞ金あるのみで、一例が僕の今、身を寄せつゝある高等官の如き、役所では随分、一二の手腕家と稱せられて局長の椅子に反身の八字髭、なかく聲望の隆々たるものだが、なアに其裏面は哀れ慘澹たるもので、家へ歸れば常に高利貸のため、ぎゆうぎゆういはされて平蜘蛛の如き醜體、見るに忍びませんよ、ところで僕は心機一轉もはや無用の屁理窟を並べない、大に悟つて大に金を得んとして居ますが、なかく得られない、どうしても工夫が付かない、實は金その物の所在も分らない、まるで

五里霧中だ、いづれの方面に向つて如何にすれば、その金を掴み得るでせうか」
 「は、は、は、簡単な煩悶ですな、それぐらゐるの事で、さう煩悶しちやアつまらない、なアに金といふものは、出来しように依つて何の雑作もなく、すぐに出来ますよ、いはゞ團子細工に等しく飴細工に等しいもんだ、は、は、は、」

苦學十年の曉は商家の小僧三年の後に及ばず、人事一切たゞ金あるのみ、金々といふ二番札の書生に向つて、その金は何の雑作もなし團子細工に等しく飴細工に等しきものといふ、塚原要藏の顔を見詰めて思はずテーブルの上に半身を押し掛りぬ、
 「その金といふもの、さう平易に簡単に何の雑作もなく出来ますか」
 「出来ますよ」
 「どうして、出来ます」

「働けば宜しい、ほんやり遊んで居ては無効です」

きくや否、思はず伸し上りし身を、どかりと椅子に落して笑ひ出しぬ、

「こりやア驚いた、こりやア案外だ、山嶽震動して鼠一疋も飛び出さない、苟くも煩悶病院といふ名稱の上に斯くも立派な慈善的の建築物が出来て、泣くに泣かれず訴ふるに道なき人生裏面の悲惨を療治すべき先生に對うて、金の事を問へば、駄菓子屋の婆も口にする尋常一般の言草で、は、は、は、たゞ働いて出来る、遊んで居ちやア無効とは驚いた、は、は、は、當院の煩悶者に對する名論卓説は先生、それ以上ないんですか」

塚原要藏、ますく、慎重の態度に言葉まで改めぬ、

「君、駄菓子屋の婆がいふ尋常一般に言草に對して、その實行が出来ますか、たゞ働いて出来るといふ平凡簡單の言葉を事實上に現はし得ますか、聞けば或法學校を三

年以前に卒業して今は或高等官の許に寄食するといふ、その君に對うて、これ以上の名論卓説は無い、心機一轉、既に學んだところを不用とすれば其他に於て、鐵砲も結構、身に疾病なくンば土方でも泥溝浚渫でも其職を選ばず、まづ自己一身の五體を動かして自己一身の存在を確めなさい、いくら議論が面白くても現在の事實上わづかの因縁に取纏つて他人の寄生蟲となつて分際で生意氣に自己が食ふ以上の金を、は、は、は、地獄の釜の上を一足飛びといふ諺はあるが、實際この世の中を、さう自由に飛べるモンですか、糸目の切れた奴風、空にばかり高く舞ひ揚つても落ち付く場所の分らないやうぢやア困る、ある俳文の洒落に、蟹の目の上にのみ飛び出て猿の手の尻に及ばぬ、といふ事がある、失敬ながら君なにかア現在それだ、つまり口が大きくて手が小さい頭腦が散漫で目的が茫漠だ、思考力の中心を失つて現

實界の歩調が狂ッてる、金を團子細工に等しく飴細工に等しいといふ言葉を、夢に牡丹餅、濡手で粟といふ事に解するから不可ない、細工をする團子の材料は無償で來ないよ、加之も其上に指頭の練磨と加減が入るんだ、飴細工また飴を拵へた上に伸縮自在の技術が必要だ、凡そ金はね、その事業と其人物の程度にも依るが、まづ着て住んで食ッて困らない以上に於て工夫すれば、どうでも細工の出来るもんだ、ところが自慢にもならない人間通常の衣食住さへ、他人の厄介になッてる今日の君として、いくら心機一轉しても百轉しても無効だ、第一また當院で療治する煩悶者は、身を粉にして働いても食へず稼いでも及ばず泣いても喚いても到底、死ぬより外に道がないといふ不孝の極、不運の頂上、その悲惨なる患者を收容するので、まだ泣くにも喚くにも人生あらゆる不幸と不運を容るゝに充分の餘地ある君の如き人間を診察するところではない、讀んで字の如く煩悶の域へ達するには、もう少し瘦

せて青ざめて年を取ッて病氣の三四度も、してから來なさい、まかり間違へば破戸漢の下ツ葉か破れ壯士の先驅にもなり兼ねない君として、のそく平氣に來る病院でない、さもなくば二十萬と三十萬、ウンと借金でもして、手も足も出さず首も廻らないといふやうな、四面楚歌中の煩悶者となッて來るが宜い、やうく學校の窓からパノラマ式に覗いたばかりで机の前を離れて僅に三年、まだ世の中に一步も踏み出さない青書生が、金も煩悶もあるもんか、ふざけるにも程度のおツたもんだ」

塚原要藏、俄の大聲に喚鳴り立てぬ、

「おい小使、この二番札は間違ッてるぞ、これを抜いて順々に後の番號へ入れて置け」

第三番札に呼び出されしは三十一二の女、世に貴婦人令嬢といはるゝ身は箱馬車の中でも震へ上る師走の寒空に、哀れや丸裸でないといふだけの申譯、ほろくの單衣二

枚まいを重ねて、名なばかり残のこる毛け繻じゆ子の古ふる帯おび、繼つぎ合あせの前ま垂たれに脛はざの露あらはを塞ふせぎ、擦より切きれし裾すそに纏まとはる、素す足あしのまゝ、あぶら氣けもない憂うれ苦く勞らうの結むすび髪がみ、差さ俯しうきながら肩かたを凋しほめ身を縮ちぢめて入り來くる風ふう情ぜい、いふまでもなく九尺しやくけん二間にまの裏うら長なが屋がやに蜘蛛くもの巢すの貧ひん乏ふ世よ帯たい、いかなる顔かほかと思おもひ見みれば、これは案あん外ぐわい、少せう説せつの外ほかは殆ほとんど事じ實じつにあるべからざる目め鼻はな口くち元もと、磨みがかねど自然しぜんの珠たま玉たまは光ひかりて、くつきりと色いろ白しろの優やさ女をんな、今いままで花くわ柳りゆうの巷ちまにに身みも賣うらす、同おなじ長なが屋がやの横よこ戀れん慕ぼに嫉ねた妬みやの白やい刃はを受けぬが不ふ思し議ぎなり、大おほ島しま院いん長ちやう、わざと慇いん懃ぎんに言こと葉はを和やはらけて打うち解とけたる體てい、

「三番札はんぱんは和女あなだね」

「はい、さやうで御坐ございます」

「お何歳いくつだ」

「ことし三十二になります」

「御亭主ごていしゆは」

「まことに、お恥はづかしい、つまらない者もので御坐ございます」

「お子こさんは、ありますかね」

「二人ふたり、御坐ございまして、姉あねの方が十一になります、弟おとうとは三歳みつさいで」

「は、ア、いゝ子こ持もちだ、御亭主ごていしゆの職しよく業げふは、何なにを」

「ほろ車を曳ぐらいて居をります」

「なるほど、して御亭主ごていしゆは、幾いくつ歳さい」

「ことし四十一で」

「をかしい事ことを聞きくが、和女あなア幾いくつ歳さいで其その、その御亭主ごていしゆを持もたれた」

「二十歳はたで御坐ございましたか」

「二十歳はた、ふむん、二十歳はたで、その當時たうじは御亭主ごていしゆも、まさか車くるまを曳ひいて居をられなかつ

たでせうね、和女も相當の支度をして、嫁入ッたんでせうね、失禮ながら現在の境遇になつたのは、いつ頃からです」

「もう四五年、以來で御坐いますか、その四五年といふもの、二人の子さへなければ妾、とても生きては居りません筈で、車を曳くと申しましても實は長らくの半病人で御坐いますから、まるで妾一人が、纜の内職で、親子四人どうして先生」

「いや、それだけ聞けば萬事、お察しする、何の内職です」

「夜の目も寝ずに、卸し下駄の鼻緒を、縫ッて居ります」

「身體が資本の車を曳くに、その御亭主が、半病人で、まだ用に立たない子供が二人、なるほど、尋常一様の苦勞でない、今のまゝで月に幾何ほど、あれば、兎も角も、暮して行けますか、實際また月に幾何ほど平均の収入がありますか、差引、どれほど足りません」

「たゞ生きて居ると、いふだけの事で御座いますから、せいぐ月に七圓か八圓、平均して這入りますれば、どんなに氣樂で御坐いませうか、それが、やうく三圓か、たかぐ四圓で」

「ざつと八圓から三圓を引き去れば五圓ですな、その五圓のため、親子四人がよろしい、出來得る範圍内に於て五圓の出所を教へてあげますが、それに就いてなほ立入ツて委しい事を聞きますよ、世間の所謂恥と外聞を捨て、偽らず飾らず、これまで經過して來た和女の生涯を、すツかり打ち明けて貰ひたい、妙な事をいふやうだが和女の容貌と現在の境遇は、餘儀なく壓迫し來るべき筈の浮世といふものに對して、餘程の反抗力がなくば今日まで持ち堪へられない理由だ、どうして持ち堪へたか、そこに和女の價值が定まるんだから、無論、その價值に依ッて産み出す五圓ですよ、何事も隠さず、さらけ出して話さない」

第三番の煩悶患者は、ざつと浮世の帳面上、氏なくして玉の輿に乗るべき筈の容色を、どう間違へてか片目でも跛でも濟むべき九尺二間の裏長屋に埋めて、半病人の亭主と二人の子供を抱へながら貧乏動きも出来ぬといふ世話女房、ますます差俯いて袖に餘り目に餘る一雫を、ほろりとテーブルの上に落しぬ、

「委しく、お話し申せば、いろくの辛い、悲しい、口惜しい、さんぐの目に逢つて来たもので御坐いますが、かういふ約束に生れた不運の身と諦めまして、世間の事も、人様の事も一切、耳に入れず、目に見ず、第一また自分が自分で生きて居るのでなく、妾が見放せば死ぬより外に道のない亭主のため、どうなりますか、兎も角も行末の長い子供のため」

大島院長、組みしまゝの腕も解かず、靜に首肯きぬ、

「お氣の毒な運命だ、しかし世間の事に耳目を閉ぢて、かういふ約束に生れた身と諦めた點が實に、實に遺憾なく貴女を辯明して居る、ところで、これから將來も今までの通り立派に、遺憾なく辯明して行かれますかね、つまり御亭主の病氣が今より重くなつても、今まで通り二人の子供を抱へて自分一人の鼻緒の内職で、やツて行けますか、きけば現在でさへ月々四五圓づつ足りないといふ瘦世帯を、失禮ながら女の其瘦腕で」

「さ、そこで御坐います」

「無論、そこが寸隙のない身體で、わざと當院へ來られた第一の理由だらうが、まづ和女の思考を聞かう」

「其日々に追はれまして蟲のやうに生きて居る身で御坐いますから、別段、思考も何も」

「よろしい、無いから来たとあれば、一應、意見を述べて見よう、どうですな、和女、思ひ切つて、その容色を、賣物にする氣はないですか」

「えッ、賣物」

「いや、同じ容色の賣物にも種々の賣工合がある、半病人の亭主を抱へて二人の子供を持つて和女には、昔の小説めいた身を汚して色を賣れといふのではない、まづ和女の貞節は、いかに高潔でも、そりやア和女の御亭主一人に對する淑徳で、道義心の薄くなつた今日の社會、とても事實上に買つてくれない、もし何等かの機會に新聞へでも出て譽められるぐらゐるが關の山で、また鼻緒の内職、これが到底、いくら働いても稼いでも限りある時間と勞力の外、定めた賃錢以上に取りれる筈がない、して見ると和女の身體で、世間から現在の收入より多く得んとすれば、不本意でもあらうが、幸ひ持つて生れた其容色だ、また半病人の御亭主に車を曳かすといふの

は最も拙劣の策で、月のうちに十五日、無理に稼いだところで、その無理が残る十五日に崇つて差引、何にもならないのみか、いは、良人の骨身を削るだけの事だ、ね、つまり和女の夫婦は處世上、うき世を渡る上ですよ、それも餘儀ない苦しい浮世を渡る上に於て、頗る下手だ、あまり無用の正直過ぎた苦勞だ、なぜ外で車を曳くより家に居て比較的、半病人にも安樂に出来る鼻緒の内職を御亭主にさせない、そして貴女ア何故、外へ出て比較的、さのみ苦勞もなく收入の多い方面に働かない、子供は御亭主へ任して置いて宜しいぢやアないか、ところで、身を汚し色を賣るんでなく、人の妻として差支ないかぎり其容色だけを賣つて行けば濟む理由だが、どうです方法を教へませうか」

いかに何を感じたか、答へもなく顔を赤らめて、またもや差俯きし頭上より、大島院長の目鏡越、ぎろりと例の如く光りぬ、

大島院長、一入さらに重々しく言葉を強めて力を込めぬ、

「苟くも人の妻に對うて、その容色を賣れといふ言葉は到底、通常一般の口より出るべき筈のもんでない、ないが今日の事實上、餘儀なき和女の境遇と不運は手強く襲ひ來つて、この大島逸平に、この慘酷なる言葉を發せしめます、つまるところ、半病人の御亭主に逆も遣り通せない第一また差引勘定の合はない車を曳かして、自分は夜の目も寝ずに女の瘦腕で二人の子供を抱へながら鼻緒の内職、いかにも夫婦あはれに共稼ぎの點は同情に堪へんが、たゞ恐る、かぎりある身體と限りなき苦勞のため或は夫婦共稼ぎの共倒れになりはしませんかね、もし萬一、さうなれば後に残る二人の子供はどうなるでせうか、こりやア和女を理詰にして、わざと泣かせるのではない、お氣の毒だが實際の成行上、遅かれ早かれ竟には免れない運命ですぜ、それま

で和女、それを承知で半病人の御亭主に車を曳かせますか、また鼻緒の内職で二人の子を抱へ切れますか、とても出来ないでせう、出来ないとすれば、今のうち出来ない事を捨て、出来る事をするより外に道はありますまい」

もはや差俯きしまゝ、顔も得あけず、あるにもあらぬ身を絞りての濕み聲、

「出来る事と、申しましては」

「内で泣くより外へ出て、奉公しなさい奉公を」

「どういふ、奉公で御坐います」

「そこだ、つまり容色だ、幸か不幸か和女は世間普通の目より誰が見ても和女の境遇にあるべからざる容色を持つて居る、どうしても半病人の車夫を亭主に持つて二人の子供を抱へながら夜の目も寝ずに鼻緒の内職する女とは思はれない、ところで諺にいふ藝が身を助ける不幸で、もし鼻緒の内職外に今の境遇を凌ぎ得る藝がない

とすれば、時と場合、已むを得ざる次第だ、篤と御亭主に相談して、いや因果を含めて、その容色を磨いて、徒らに稼ぎ死するよりも、料理屋の女中奉公、でもした方が、得策でせう、今日までの和女を以て將來の貞節は保証し得らる、理由だから、差支のない限り、ずつと下品に突ッ込んでいへば、浮世の馬鹿者に手を握られるぐらゐるを覺悟の上で、どツか客種の善い料理屋の女中奉公が現在に於ける餘儀なき策でせう、今日の貴女としては逆も自分の氣に叶ツた快心の點より立つ事が出来ない、どうせ何等か忍び難いところを忍んで一の犠牲物を供せなければならぬ不運の極だ、道理上の美談ばかりでは到底、和女を救ふ事が出来ない、つまり鼻緒の内職を半病人の御亭主に譲ツて、二人の子を託して、和女は外で働くより目下の策はない、外で働くには幸ひ、和女の容色それが無上の資本だ、また實際の利害得失からいへば、親子四人のうち、まづ和女一人の衣食が減じられて、客より貰ひ溜の祝儀なる

ものが其まゝ家へ送られる、のみならず、その料理屋の主人なり朋輩なりに事情を打ち明けて、涙と共に哀を乞へば、比較的、さういふ事に却ツて同情の多い彼等の性質上より、自然また意外の便利を得ますよ、或は親子三人の食物が或機會に依ツて運ばれるかも知れない、その代り和女は身を粉にして二人前も働くべしだ、つまり來る客には容色の輪廓だけを賣り主人と朋輩には涙と眞心を賣るんです、國でいへば亂國時代だ、人でいへば非常手段を取るべき時だ、徒らに泣いて屈して、親子四人が抱き合ツたまゝ飢餓を待つに及ばない、いよゝゝ和女、それと決心すれば和女を料理屋へ運び込む最初だけの衣服は當院の特別經濟より支出してあげます、また御亭主を呼んで懇々、説いてもあげます、どうですな、兎も角も和女ア、二日ほど入院して、よく考へなさい、その二日間は無論、これまで和女の内職より得來ツただけの賃金を寄附しませう、容貌、態度、言語、事情、すべての點が當院に於ける

特別待遇の範圍内に叶ッてる」

第四番札に飛び込み來りしは三十四五の男、どう見ても今日の世の中に寸分の隙もない商人體、もし圖に中れば今一步で當世紳士の仲間入もすべきところを、あまり大膽に智慧と工夫が廻り過ぎて金が廻らず、いよ／＼この年の瀬の柵に引ッ掛りしまゝ、動きも取れぬ苦しさ、進退こゝに極りて人知れず當院へ馳け付けぬ、

されど流石に活氣は失せず、この大晦日さへ無事に越して一方の血路を開けば、また直ちに盛り返す勢ひ、入り來るや否、自己が頭を兩手に押へてテーブルの上より野心満々たる額越の目色、じろ／＼塚原副院長の顔を見上げぬ、

「先生、時が時ですから御挨拶も致さず萬事、露骨に申し上げますが、いやはや實に當年は前後にない失敗また失敗の極、酷い暮に出ッ喰はしましたよ、するだけの借

金も仕盡し、いへるだけの嘘も言ひ盡し、出来るだけの無理も押通して、あらゆる悪戦苦闘の結果、天なる哉、命なる哉、いよく討死です、無論、敗れて討死は固より覺悟ですが、あまり花々しくない討死で聊か残念に思ひます、同じ討死するくらゐなら、せめて人に唄はれる名を残したいンです、もし萬一、助かる道があれば、たとひ不具になつても實は助かりたいンですが、何とか御療治の方法は御坐いますまいか」

塚原副院長、此奴たゞの鼠でないと見て取ツて、冷かなる笑ひ聲を頭上より浴せかけぬ、

「はゝゝゝよく戦ふものは戦に死す、さうなるのは當然の結果です、委しくは分らんが今君の言葉に依ツて察すると自業自得だ、少しも不思議はありませんね、實は療治するところも無いでせうよ、そも／＼この療治といふものは、やはり打算上の

数字的で、この一點を切り去れば、あとの全體が無事に残るとか、或は一時の苦痛を忍んで他日の安樂を求め得らるゝとか、すべて差引勘定の付くのが療治の功能だ、するだけの借金を仕盡し言へるだけの嘘も言ひ盡し出来るだけの無理も押通して、あらゆる悪戦苦闘の果ならば、男らしく未練氣なしに、往生して、心持よく討死なさい、今更ら自己の罪、罪といへば語弊があるかも知れんが、まづ自分の覺悟で爲た事を天命に歸して演劇の時代文句ぢやアあるまいし、天なるかな命なる哉は蟲が善過ぎる、あまり贅澤過ぎた言葉だ、は、は、は、しかし罪を他に嫁して、たとひ事實にせよ彼奴がどうしたの、此奴のためにかうなつたといふが如き愚痴を滾したり、又とても返らぬ失敗歴史を自慢半分と悲鳴半分に讀み立てる奴よりは、比較的、方法に依つては多少また療治の出来る點があるらしい、どうせ種々の事業に手を出したんでせうが、第一まづ世間に對する本看板の商業は何です」

「別段、これといふ商店を開いて看板を出した本業は持つて居りませんが、まづ世間より見ての重なるものは、鑛山でせう」

「鑛山いはゆる山師です、いち／＼面倒臭い人間を相手に僅少の金を取るより、文句のない地の底を叩き割つて一時に掘り出す商賣、當れば愉快でせうな、は、は、は、また鑛山を重なるものといへば、他に重ならざるものがある筈、つまり山師仕事の外に何を、どういふ事業に關係しました、米、株その外の投機界には無論、手を出されたでせう、過日まで隆盛を極めた競馬なんかも随分好きでせうね、御本宅は何處です、定めて妾宅も御立派だらうし、從來の取引銀行は、いづれです、これまで濫發の手形に振出と裏書と、どツちが多いです、御家族は何人です、負債の總高は幾何です、失敬ながら今月に入つて最も手強い債權者は、どういふ種類の人間です、まだ解決の就かない差押事件は、どれほどあります」

「いや、實に恐れ入りました、お言葉の通り四面楚歌の聲で、お察しの通り包圍攻撃の眞ッ最中、もはや萬事こゝに休して、ぎゆうとも、すうとも、いはれない次第です、どういふ工合に討死すれば宜しいでせうか」

商人の失敗といへど、たゞの商人ではなく、たゞの失敗ではない奴、いちく副院長の塚原要藏に急所を突ツ込まれて、今更ら青息吐息の本音を出しぬ、

「恐れ入りました、面目次第もない事ですが、實は鑛山も人に勧められた事業で、金を山より掘り出さないうちに、借金の山を脊負ひまして、おのれ一跳ね、跳ねてやらうと思ツた競馬には首尾よく的が外れ、家倉地面を抵當にして、こゝ一番と覘ツた米の買占はガラ落ち、血の出るやうな酷工面で賣り叩いた株は遠慮なく、すんくと棒立に立昇るといふ始末、無論、取引銀行では容赦なく首を斬られ、多年の關係

上、否應いはさぬ筈の友達は、どいつも此奴も言ひ合はした様に遁け廻ッて、此方で遁け廻らうと思ふ奴には運わるく出ツ喰はして、一時に押寄せた債權者七人のため本宅は執達吏の封印べたく、張り付けられ、かうなる時の用意かたぐ、わざと身分に過ぎた妾宅を構へて、内々ミツと入れて置いた女に今年の春以來、とんでもない悪黨の情夫があるとは夢にも知りませんよ、加之も本城の没落を見るや否、素早く家は他人の名義となつて家財道具を賣り飛ばされ、二人が手に手を取った後足で砂を浴せられた器量の悪さ加減、實は恥づかしくツて、お話にもならない馬鹿を見ましたが、この馬鹿野郎どうすれば始末が付きませう、泣顔に蜂も蜂、あまり寸隙なく念入に刺され過ぎて血の氣の狂ツた故か、以前はこれほどでもなかつた奴が實際、ほツと致しましたよ」

「なるほど、いくら大膽で横着な人間でも事實、さうなれば、多少ほツとするでせう

な、は、は、お察し申すが、君の身に取っては無上の訓戒だ、いや光榮だ、有難く思ふが宜い」

「光榮、訓戒は兎も角、これが光榮とは、どういふ光榮で御坐います、どう有難く思つて宜いんです」

「光榮の至極ぢやアないか君、さういふ場合には得てよくあるこつた、全體、君のやうな遣口の間人が運に盡きて失敗の極、めちやくの泣顔を蜂に刺される時は、妾宅を人に取られて可愛い女が情夫と遁けるぐらゐで治らない、必ず本宅の本妻も有夫姦をしなければならんだ、その上に君の身體が病氣で動けなくなるのが當前だ、ところが、不思議に本宅は差押を喰つても本妻は有夫姦をせず、自分の運は盡きても身體は無事に達者といふのは實に有難い事だ、わるくすると君の妾が行きかけの駄賃に君の寢首を締めるぜ、は、は、は、」

「先生、貴君ア私を愚弄なさるんですか、この煩悶病院は煩悶患者を救はずに殺すところですか」

「さうだ、そこに氣が付けば宜しい、いかにも當院は君の如き煩悶患者を殺すところだ、一旦殺して仕舞つて、その死骸に魂魄を入れ替へるところだ、幸ひなる哉、いまだ有夫姦をせざる唄アと共に九尺二間の裏長屋へ落ち込んだ後に改めて世の中へ出直しなさい、既に遣り損つた鑛山と競馬と相場の熱が取り切れないから煩悶するんだ、贅を盡した妾宅の夢まだ覺めず情夫と遁けた女に未練があるから煩悶するんだ、差押へられた家倉を取戻さうとするから煩悶するんだ、過去的一切を過去に葬りなさい、もはや死んだ氣になつて身を落しなさい、思ひ切つて九尺二間の裏長屋へ叩き込む外、君を療治する方法はないよ、その九尺二間へ身を落した上で、どうも、かうも、ならなくなつた曉に來なさい、さうすれば、また、いろくくと療治

の仕ようもあるからね、は、は、は、後の患者が支へてる」

いづれ煩悶病院の控所に悄然たる人間、もとより金氣もなく血の氣もなく生氣を失ひ活氣を失うて魂魄脱殻の五體こゝに四十餘人、自己が順番の來るを福の神に呼び出さるゝ心地、ものゝ哀れに智慧も工夫もない瘦腕を組みながら、今かくと待てる折しも、大島院長、ぬツと入り來りぬ、

差俯きし一列の雁首、繰り絲に引かるゝ如く、おもはず仰いで其靴音に見返れば大島院長の姿ぐるりと廻りて、はや正面に立てり、

「や、諸君、嘸お待遠で御坐いましたらうが、何分、際限のない多勢を相手に只二人で遣る仕事ですから、とても、なか／＼思ふやうに果敢取りませんよ、しかし大切な時間を潰して今日こゝへ來られた諸君は、失禮ながら家に在らしつても別段、さ

う福々しい快樂のない方と存じますから、まア公園のロハ臺に腰を掛けて思案するよりは比較的よからう、ぐらゐの程度で堪忍をして戴かう、は、は、は、時に突然ですが、御相談を願ひたい、といふは外でない、一年の最終、うき世の總勘定、人間裏面の報告決算期、どんな暢氣者も多少、平生の油斷大敵を引受けて一合戦せねばならない年の暮でしたから、わざと殊更ら金に就いての煩悶者のみを選びましたが、實は多くて十餘人、せい／＼七八人と思ひの外、けふ一日でさへ此通り五十人以上ですもの、この分で行けば所謂千客萬來どれほど押掛けてくるか知れない、のみならず療治上に於て最も適切に應用もされ効果もあるべき筈の年内に、はもや餘日がない、第一また今日、既に診察した五六人の患者に就いて見ると、大小深淺の差はあるにしろ、つまり金その物のため不意に慘澹たる致命傷を受けた患者で無く、いはゞ殆ど自業自得、金その物のため當然、來るべき病源を豫告されながら、うか

うか不養生して寢込んだといふ患者ばかりだ、いづれも案外の單純で、さらに腕を組み首を捻るほどの面白い、いや面白いと申しては濟まんが、實は待ち受けた甲斐もなく何だか物足りない病人が多いやうだ、加之も一夜あけての春となれば、この人間といふ一時遁れの横着もの、路頭に斃れて餓死せざる限りは、すぐに氣が變つて去年の事を忘れ、ほろ酔機嫌の鼻唄も嘯り兼ねもせんから、甚だ不本意ですが時と場合の事實上、餘儀なく一まづ金に就いての煩悶者を、謝絶は致しません、決して療治しないとは、いひませんよ、しかし當分のところ金に就いての患者ばかりを引き受ける事は出来ません、あらためて今日より廣き意味の煩悶者を取ります、戀の煩悶者、家庭の煩悶者、要求の煩悶者、主義の煩悶者、夢幻的の煩悶者、その他に於て人生ありとあらゆる一切の煩悶者を受けける決心ですが、折角かうして來られた諸君を此ま、歸しては雙方のため遺憾に堪へませんから、今こゝで諸君の前に

立ッて一列一體の療治をさせよう、どういふ療治が出来るか、いかに諸君の病所へ感應するか、これからです諸君、いづれも首をあけて氣を張ッて、この大島逸平の髯面に滿場の視線を注いで下さい」

大島院長、いよく馴れ馴れしく面を和らけながら、坐談に等しく心易けに打ち解けて語り出しぬ、

「今いふ通りの理由で、金の煩悶病には最も面白い効果を呈すべき年末の餘日なく、つまり一年中の治療に適した好時機が盡きた次第ですから、いちく諸君の事情を聞いて、否、病症を診察して、いちくこれに應ずるよりは雙方の都合上、こゝに萬能膏ともいふべきものを差上げて置きませう、さのみ大した效能もあるまいが當分、まアこの膏藥を患部へ貼ッて御覽なさい、その膏藥とは外ではない、所謂る

貧乏神に對する一の防禦策で、寧ろ退治策で、いはゞ常に諸君を取ツて押へて動かさない、この貧乏神といふ奴を下から跳ね返す方法だ、全體、諸君は、あまり正直過ぎて、あまり臆病過ぎて、あまり神経過敏に小心翼々過ぎて、いつも貧乏神に追ツかけられるから不可ない、追ツかけられて遁け出すから猶更ら不可ない、遁けると彼奴ますく圖に乗ツて面白半分、どこまでも諸君を追窮するか知れない、さらぬだに昔から人間を馬鹿にして追ひ廻す奴だもの、よほど死物狂ひの喧嘩腰で踏み止らないと無効だ、ところが今日こゝに集られた諸君中、まづ一人の踏み止つた人もないらしい、失敬ながら實は追ツかけられて遁ける事も出来ず、そのまゝの立往生に居縮んで腰を抜かしたンぢやありませんかね、はゝゝゝしかし貧乏神といふ奴は、いづれの方面いかなる人に對うても容赦のない執念深い、残忍酷薄の性を帯びて居ますよ、古來これがために智慧も工夫も力量も活氣も奪はれて、可憐ら堂々たる男

兒の生きながら腐り果てたものが、どのくらゐあるでせう、身は貧にして心は富めの流で、寧ろ一種の誇りとした時と人もありますが、事實に於て餘儀なき今日の時勢も、はや清貧を貴ぶよりは清富を貴ぶべき世の中となりました、この世の中で、この貧のために迫害され、侮辱され、壓迫され、つまり賤しく卑き物質の金のために高き尊き靈魂を保てる人間が、あけても暮れても翻弄的に七轉八倒させられて、殆ど生死の間に煩悶苦惱するとは、何たる心外千萬な事でせう、たとひ暖衣飽食の富は得ずとも、肥馬輕車の快は得ずとも、せめて貧乏神に追ツかけられない用意工夫、いや追ツかけられても宜しい、あまり残念だから、潔く取ツて返して組打するだけの勇氣がなくてはならない、その組打の方法が即ち諸君に呈する萬能膏だ、いはゞ貧乏しても貧乏に泣かず苦しまず殺されず、平氣に暢氣に貧乏の仕様があるといふ事だ、その仕様を今これから話しませう」

腫物に賣藥の貼膏藥あれど、古來こればかりは療治の届かぬといふ貧乏の穴に貼る萬能膏とは、いかなるものぞと四十餘人の患者ども、等しく大島院長に眼を注げば、例のブラシ髯を撫でて口を開きぬ、

「今こゝで諸君に呈する萬能膏、つまり貧乏神のために殺されない工夫、さらに言葉を碎けば、貧乏の仕やうですが、實際この貧乏といふものには、よほど上手下手のあるもんです、下手に貧乏すれば人間慘澹の極で、一家離散の悲境は勿論、窮して亂して法律の罪人となるか、正直に突き詰めて首を吊るか川へ飛び込むか、兎も角も世の中に存在を許されない事となる、しかしまた上手に貧乏すれば寧ろ却つて暢氣に面白く、心配なしに洒落た世の中を送る事が出来ます、ところで到底、いくら稼いでも藻掻いても金運のないものは、もはや及ばない富を得んとして無理に半狂

亂の苦勞するよりも、靜に陣を引いて貧乏の研究、即ち上手に貧乏する方法を考へるが宜しい、全體この貧富といふものは人力の外で、いはゞ殆ど天の配劑で、たゞ働けば金が出来るといふ如き簡易單純の獎勵法で成否を斷言し得らるゝものでない、むづかしく説けば金と人とは別だ、富貴と人格は一致するもんでない、さらに悟れば、貧より富は辛いものである、貧乏寸暇なしといふが、實は金持寸暇なしで、金があるために苦しむ奴は、金なきがために苦しむ奴よりも多い、飢ゑて死ぬ奴よりも食ひ過ぎて死ぬ奴の多い道理は諸君こゝだよ、人間の定命を保ち得ずして夭折の屍となる統計表は、衛生の何物たるを知らない九尺二間の裏長屋よりも醫藥攝生に事を缺かない大厦高樓の上に多きを示して居ると、如斯いへば諸君、いかにも諸君は幸福に生れて居らるゝやうだが、偕その貧乏にも程度のあるもんで、現在こゝに集まつた諸君は、あまり幸福過ぎては居ませんかね、はゞ幸福も過ぎては不可な

い、貧乏も貧乏、あまり行き過ぎては困る、ところで貧乏の中庸、宜い加減の貧乏になる工夫が専一です、いはゆる上手貧乏だ、世間普通、貧乏を上手にするといへば、旨く借金でもして、やりくり算段を巧みにするが如く聞えるが、然らず、決して然らず、そりやア無効だ、そもく借金といふものは自己の信用代價で、何等か有益の事業を起す外、衣食住のためには、するものでない、すべき筈のもんでない、よし出来たところで、一方に金を貸して利を取って立つ奴がありとすれば、一方に金を借りて利を取られて倒れるのは當然の理で最も見易い結果だ、また、やりくり算段、こいつは一時の便法に似て實際、長く苦しめらるゝ拙策の原因だ、どうしても差引勘定に合はない、近い一例が諸君、衣類を質屋へ入れて利に利を喰った上、いやくながら半泣の澁面に己むを得ず、これを流す奴は貧乏の下手で、入れる時は逆も出せないものと思ひ切つて男らしく、その衣類を叩き賣る奴が貧乏の上

手だ、質に入れて流す奴は容易に出来ないが、未練氣なしに叩き賣る奴は十中八九また必ず出来ますよ、つまり過去に徒勞する奴と、將來に希望を抱く奴との差別だ、加之も質に入れるより賣る方が金にして多い、おまけに受け出したいと後の心配がないだけでも徳だ、ですから借金は貧乏の救済術でない、やりくり算段は貧乏の便宜法でない、ところでやりくり算段もせず、借金もせず、どうして貧乏の中庸を保ち、どうして上手に貧乏を仕遂げられるか、といふ問題になる、その問題の解決が、今こゝで諸君に呈する萬能膏藥ですが、うかく饒舌り過ぎて、あまり長くなりましたから、ちよいと息を入れて、いよく上手貧乏の秘訣を語りませう」

大島院長、いよく態度も言葉も打ち觸けて、貧乏の秘訣を語り出しぬ、
「諸君、今いふ通り世間普通の目で、ちよいと才子らしく腕のあるやうに見える、借

金と、やりくり算段と自繩自縛の結果は、寧ろ貧乏の下手なるもので、この貧乏を上手にするには、いかなる場合にも智慧と工夫は禁物だ、なるべく愚直に、なるべく無器用に、なるべく惘然して、無慾淡泊に世を送る工夫が肝要だ、第一また貧乏人は有形無形の區別判然、身を敵として心を味方とする必要がある、つまり自分の身體を仇敵の如く苦しめて働く一方に、自分の心を主君の如く大切に保護して、入らざる無用の心配させない工夫が最も肝要だ、心配は身體を安樂に置く金持のすべき事で、身を粉に碎いて働く人間が頭腦を痛めて堪るもんか、富に對する貧で、紳士録には乗らないが區役所の戸籍帳簿へ前科もなく立派に姓名の記入されてあるかぎり貧乏は人間の恥辱でない、金もない代りに心配もないといふ精神上の慰安で、火事も況棒も怖くない暢氣な境遇に生きて居らなければ、同じ人間として貧富對等の差引が合はない、ところが今日世間の常態はこの反對で、多き實例の示すところ、

働くべき貧乏人が、否、働かねば食へぬ筈の貧乏人が身體を忘れて、入らざる餘計な苦勞に心配ばかりして居るやうだ、これぢやア殆ど貧乏の立場がない、貧乏その物が直ちに人を殺す白刃といふの外、下手も上手も解釋の仕やうがなく、富は富として置いて、こゝに貧といふ名目のある以上、その貧に處する道のない筈はありませぬ、きつと貧は貧で確實に人間の安居すべき點があるに相違ない、といふ事を諸君まづ自覺しなければ無効だ、つまり貧富いづれに煩悶の種が多いかといへば、心配なく働いて食ふ貧乏人よりも利害得失その他の複雑なる世態人情に纏はれて油斷の出来ない金持に患者の多い筈だ、貧乏だから死にたいといふ奴は、遠慮なく首を縊るなり川へ飛び込むなり乃至また鐵道往生なり御好み次第、さつさと早く御勝手に死んだ方が宜しい、しかし今日こゝに來られた諸君は、生きて居るのが目的でせう、人間、生きて居る以上、頭腦が身體か、いづれ其うちの一を生活の犠牲に供すべき

が當然で、まづ頭腦を金持の必要とすれば、身體を貧乏人の資本として、役割の違
 ツた無用の心配せずに稼げば、この貧といふもの、決して苦しいモンでない、のみ
 ならず實際また人の飢死するには、少くとも三週間以上、一月ぐらゐるはかゝるさう
 ですから、なアに二日や三日、腹に食物を入れなくツても口で息さへ呼吸すれば大
 丈夫だ、稼ぎたくても仕事のないといふ奴は、仕事があつても稼がない奴で、自己
 の身分も顧みず生意氣に取る業を擇ぶからだ、山里の片田舎でなし四通八達の巷に
 織るが如き二百萬の大都會、餡ころ餅の竹の皮を拾つて歩いて、一日の奮勵これ
 を鼻緒に糾れば一人の生命は繫けます、一年三百六十五日、いづれの神社佛閣にか
 縁日のない日はない、その縁日に夜の十二時過、人出の去つた後、蚤取眼で捜し歩
 けば五錢や十錢になるものは、きツと落ちてありますよ、若旦那の果が區役所の假
 埋葬になるとも、古來いまだ紙屑拾ひの行倒れを見た事がない、まして現在それい

上に何等か手馴れた職を持ち何等か覺えた業を持ちながら、加之も動けない大病人
 ぢやアなし、のこゝ、當院まで無事に歩いて來られる人間が、人殺しの器械でもな
 い貧乏のために苦しめられて煩悶するとは、をかしい、實は先刻より諸君に對して
 貧乏の萬能膏といふたのは、陰に閉ぢられた悲觀的の諸君を陽に導いて氣を勵ます
 ための方便ですよ、貧乏の上手と下手は頭腦と身體だ、首を垂れ腕を組んで一圓の
 事を考へるよりは身を運んで手を動かして一錢の銅貨を掴みなさい、貧乏を樂しん
 で働きなさい、人間は心の持工合た、一事だ、一日に三十錢を取れば、これは元金
 と見ず利子と見て百圓の日歩二錢五厘の割合、その一日は銀行に千圓以上の預金あ
 る心算で稼ぎなさい、日に千圓つづつ預金すれば月に三萬圓、一箇年で二十六萬圓だ、
 十年で三百六十萬圓、こりやア大きいね、もし急に引出したいと思つた時は、その
 銀行が潰れたと諦めるさ、は、は、は、稼いで取つた金は利子と見れば、天下の富豪ま

た羨むに足らない、あまり金が殖えて面倒だから當分まア彼奴等に勘定さして置く
と考へりやア氣の濟む理由だ、どうです諸君、萬事かういふ調子で世の中を渡れば
貧乏も随分また洒落て面白いもんぢやアありませんか、は、は、は、

押詰まりし金に就いての患者は、年の瀬と共に一まづ幕を閉ぢて、あけし初春の新年
早々よりいよゝ世間あらゆる一切の煩悶病者を廣く迎へぬ、
黄金の萬能力、物質的の世の中、地獄の沙汰も金次第といふ古き諺は、生活難に追
はれて人事複雑の今日ますます新なるべき筈の世態人情に於て、その金の外といへば
戀の煩悶か、家庭の煩悶か、主義の煩悶か、要求の煩悶か、但し夢幻的の煩悶か、今
日の一番札いかなる患者かと思れば、年ごろ三十一二の女、誰が目にも世間普通の言
葉より奥様と稱せらるべき女なり、

大島院長、これを診察所に迎へて、その顔を見れば、際立てる天生の美人系ならねど、
まづ女といふもの、有形状を保つには、殆ど缺點なき容貌を、たゞ無形の何物にか苦
しめられて、どこやらに我知らず淋しけの風情、いかに包めども秘せども心の底は欺
し、
人の身は、わけて人の妻たる身は、その容貌と風俗と境遇を苦樂のメートルと定め難
し、
つべき婦人の生涯中、最も羨まるべき女の決勝點なり、
されど門外の見物と家庭の内情は、ふしぎに多く反對の事實を宿せるもの、まして婦
人の身は、わけて人の妻たる身は、その容貌と風俗と境遇を苦樂のメートルと定め難
し、
大島院長、これを診察所に迎へて、その顔を見れば、際立てる天生の美人系ならねど、
まづ女といふもの、有形状を保つには、殆ど缺點なき容貌を、たゞ無形の何物にか苦
しめられて、どこやらに我知らず淋しけの風情、いかに包めども秘せども心の底は欺
し、

かれず、名優の表情よりは寧ろ巧みに、あはれに無慙に憂愁の色を帯びぬ、
「不肖ながら院長の大島逸平です」

「初めてお目にかゝります」

「甚だ露骨ですが、どういふ事で、全體どういふ煩悶のため、わざと遠路、こゝまで來られましたか、お見受け申せば立派な奥様で、いづれ定めて立派な良人も持つて居られるでせうに、その良人にも救ひ得られず、當院の患者として來られた貴女は」
「先生、妾は先生を、もはや親にも良人にも救ひ得らるゝ道の絶えた妾は、先生を神様と思つて、お縫りにまゐりました」

大島院長、組みしまゝの兩腕をテーブルの上に乗せて、おもはず眉を蹙めながら眼鏡の眼光、いと光りぬ、

「子として救はるべき親に救はれず、妻として救はるべき良人に救はれず、もはや世の中に慰安を求むる道が絶えて、當院へ來られたといふ、その一言で充分、貴女の不幸を察し得られます、加之も外面に現はるゝ貴女は社會の中流以上、いはゆる立派な奥様で、物質的の目よりは一點さらに何の不足もない境遇と見らるゝだけ、それだけ猶更ら以て深きかに悲惨なる秘密に閉ざされて居らるゝか、お察し申します、が、全體、どういふ煩悶です、たゞ言葉の上の御同情を寄せるのみでない、力に及べば及ぶかぎり、子として親に救はれず妻として良人に救はれない貴女を救ひ得る道があるかも知れませぬ」

「はい、ありがたう御坐います、實は先生、親の恥辱、良人の恥辱になる事で御坐いますから、妾さへ、死んだ氣になつて、この生涯を、どうせ不運に生れた、この生涯を泣いて通せば、それで濟む筈と、幾度か諦めては見ましたが、先生、やはり妾

も生きて居る人間で御坐います、親のため、良人のため、いかなる苦しい、悲しい犠牲に供せられても、供したただけの甲斐のない親と良人を持つて、そこで御坐います、お話し申せば實に、實に先生、凡そ世の中に、わけて今日の世の中に、不運の極も極、妾ほど残酷な運命に捉はれて居るものが御坐いませうか、親に苦しめられる者は良人に慰められるとか、また良人に苦しめられるものは子に慰められるとか、同じ闇中に葬られながらも、いづれか一方に幽の光明を、認め得られるのが、まづ世間普通の悲哀でせうに、妾の悲哀は四方、まづ闇がりに閉ぢられて、たゞ先生、人知れぬ涙の落ちる音のみが、かアすかに自分の耳へ、きこえます」

「や、お察し申す、お察し申すが、その内容を、事實を、ありのまま、委しう具體的にお話し下さい、第一に貴女は當年、お幾歳になられる」

「はい、あけまして、三十四に」

「旦那様は、どういふ御身分です」

「ある工業會社の、技師長を致して居ります」

「なるほど、親御は御両親ですか」

「いえ母で御坐います」

「どちらの」

「妾の」

「は、アお里方の母御です、ね、そして目下、旦那様の方には」

「夫婦ぎりで、あとは皆、召使の男女ばかり、せめて先生、子でも御坐いますれば」

「いや、大體、わかりました、ところで、その母御が貴女へ、いかなる苦痛を與へられるか、また其良人が貴女に對して、いかなる残忍の所爲をせらるゝか、その實際を承らう」

「先生、泣いても宜しう、御坐いませうか、どうせ半分は、泣きながら、お話し申さねば」

「よろしい、聲で語らず、涙で、お語りなさい」

生産の母より、いかなる苦痛を與へられるか、また連れ添ふ良人より、いかなる殘忍の所爲をせらるゝかといふ、大島院長へ對して涙聲、

「先生、只今も申し上げます通り、子として忍べるだけは忍んでまゐりました母の恥辱、また妻として堪へられるだけは堪へて來ました良人の恥辱、今更、俗にいふ闇中の恥を明白へ出したくは御坐いませんが、先生、今この妾の前に在らッしやる先生を、妾のため、神様と思ツて、萬事、うち明けますから」

「よろしい、この大島逸平は無論、神でも佛でもない、人間としても缺點の多い奴で

すが、今、貴女が訴へる苦痛に對する間は誠心誠意、あらんかぎりの眞實と、及ぶかぎりの同情を以て聞きませう」

「はい、有難う御坐います、母の事は暫時、二の次に置きまして現在の、良人の事から申し上げますが、實は先生、妾は今日ある地位にある良人へ嫁したもので御坐いません、不束ながら妾が陰になり陽になり、多年の間、さんざ、いろ／＼の苦勞を致しまして、やう／＼今日の良人に仕上げた、と申しては濟みませんが、實際、さういふ夫婦で御坐います」

「なるほど、いはゆる糟糠の妻なるものですな、古語にいふ堂より下されない筈の貴女ですな」

「ところが先生、只今では縁の下へ投げ込まれて、その上を蹴られて踏み付けられて、もはや泣くにも泣かれない、苦しい、悲しい、なさけない妾で御坐います」

「その苦しい、悲しい、なまけない事實の要點は、どういふ理由です」

「先生、さうして今日の地位を得た良人が、たゞ妾を踏み付けて、無いものにして世間あり勝の愛妾狂態するとか、また藝妓に關係するとか、内を外に放蕩するとか、それぐらゐの事では先生、妾は泣きません、たとひ心に何と思つて居ても、世間で辛抱する妻女のあるかぎり妾は、決して自分ばかり良人の恥辱を出したくはありませんが先生、妾の良人は、あくまで妾を欺いて置きながら、他に向うては拭ふべからざる罪惡、人としては、あるべからざる罪惡を犯して居ります」

「ふむ、どういふ工合に貴女を欺いて、どういふ他の方面に拭ふべからざる罪惡を」
「いやな事を、お話し申さねばなりません、先生、良人は去年以來、妾に對して生殖器不能といふ病名で絶えず、眞面目に醫者の許へ通ひながら、その一方では、人の妻と、姦通して居りました、加之も自分が使つて居る目下の者の妻と、また先生、

その妻は始終、妾の家に出入して、とりわけ妾が世話をしつた女で御坐います」
「や、これは酷い、こりやア、怪しからん事ですな」

「いえ先生、そればかりでは御坐いません、それに就いて、まだく大變な事が妾として實に、どう考へても諦めても、堪へられない事が數々あるんですから」

大島院長、ますく眉を擡めて、おもはず嘆聲を漏らしぬ、

「内助の功ある妻に對して、これを欺くに生殖器不能といふ病名で醫者の許へ通ひながら、その一方で有夫姦の大罪を犯すとは、なるほど、こりやア酷い、あまりに残酷だ、加之も自分の使つて居る目下の者の女房を盗むに至つては、猶更ら以ての事だが、その女房また貴女の世話になりながら、いかに何でも、よくまア、貴女の良人と、さういふ姦通になりましたな」

「先生、良人の事は暫く置いて、先方の事を申せば、その女房ばかりで御坐いませぬ、實は、その亭主も、いろ／＼と妾が世話をしてやツた男で、つまり田舎から出て来て、どこへ取付く島もない夫婦を妾が、わづかの縁より拾ひ上げて、無理に良人の會社へ入れてやツたもので御坐います、入れた後も、あれだけでは可哀さうですから、是非お願い申すと、いろ／＼良人の上役なんかへ頼み込んで、人間の價値よりも以上の給料を取れるやうに、してやツたもので御坐います」

「恩を仇で返された始末ですね、世にいふ飼犬に手を吠まれたンですね、しかし其夫婦は目下、どうして居ます、第一いかなる場合に、どうして貴女は良人の罪惡を、姦通の事實を押へました」

「先生、そこで御坐います、もしこれが妾の手で、その事實を押へて、見現はしたものとすれば、まだしも、妾一人の不運の犠牲にして世間への面目も保てますが、口

惜しい、残念な事は、先生、先方から顯はして來ましたので」

「ふむン先方から顯はして來た、そりやア、どういふ工合に」

「先方と申しても、流石に、その女房からでは御坐いませぬ、その亭主が、だしぬけの不意に先生、出刃庖丁を持って、加之も良人の不在中、暴れ込んて來ましたが、妾は其時まだ多少、自分の良人を信じて居りますから、それも他の事と違つて現在、まる一年半も生殖器不能といふ病氣で、たゞ口ばかりの病氣でなく妾に對しての事實上、また絶えず醫者へも通つて居りますもの先生、まさか、よもや、さういふ筈がないと」

「いや、ないと信ずるのが當然だ、妻としては、貴女としては一點の疑ふべき餘地もなく巧みに、事實の上に欺かれて居るんだからね」

「ところが先生、その亭主に、争へない動かさせない證據を、ずらりと眼前に並べられ

て、向き直られた時の、妾は、先生、どうなります、お察し下さい、其上この始末を、世間へは勿論、自分の兄弟にも、いへない、この残念な、無念な、口惜しい馬鹿々々しい、前後策を、つける役目が先生、この妾で御坐います」

大島院長、おもはず首を縮めて、閉ぢたる目を開きながら、聲を潜めぬ、

「なるほど、人の妻としては實に堪へ難き苦痛の極だ、いはゞ殆ど遺憾なき侮辱を蒙りましたな、加之も其、その前後策を付ける彼目が貴女とは、あまりに残酷だ、あまり馬鹿々々しいが、その馬鹿々々しいところに寧ろ立派な貴女が、顯はれて居ますよ、自分の不運は別問題として、その堪へ難き苦痛の極を忍び遺憾なき侮辱を受けながら、なほ良人のために盡した貴女は、たしかに立派な妻だ」

「先生、私は、かやうな事で、譽められたくは御坐いません、たとひ世間から、わる

く、いはれても、いかなる冷酷な攻撃を受けもしても、暖かき一家の圓滿さへ保ち得れば」

「そりやア、さうですが事實、既に保ち得られない貴女としては、その苦痛と慘澹に同情を寄せるの外、呈する言葉はありません、ところで、どういふ工合に前後策を付けました」

「先生、妾としては外に、手の付けようが御坐いませんから、残念ながら、やはり金で、いくら出しても金は惜しく御坐いませんが先生、飼犬に手を咬まれて、その咬まれ代まで取られた上、一年半も欺かれた良人のため、さんざ世話した奴に先生、手を支へて、頭を下けて、謝罪いたしました」

「や、きけば聞くほど實に、お氣の毒な次第ですな、しかし金で済みましたか、つまり金で、その金を先方の亭主が、受取りましたか」

「はい」

「ちよいと、お待ちなさいよ、先方の夫婦は元來、貴女の世話になつた夫婦で、その亭主は現在、同じ會社で貴女の良人に使はれる目下のもの、その女房も常に絶えず貴女の許へ出入するもの、そして貴女の良人と先方の女房と、加之も其亭主が出刃庖丁を持つて不意に暴れ込んだほどの騒動が幾何にしる、たゞ金で、無事に、はてな、聊か變だ、もしや萬一、先方の夫婦が相談上の仕事ではありませんかね、俗に所謂美人局なるもんぢやアありませんかね」

「いえ先生、妾も一時、實は、さうかと存じましたが、強ち、それでも、無いらしい點が御坐います」

「貴女の品性から割り出して、さうでないといふ外に事實、さうでない確實な證據がありますか」

「別段これといふ、確實な證據を、並べ立てる事は出来ませんが、つまり先方の夫婦と、妾の夫婦と對照して、かういふ工合になるべき理由が、あるやうに考へます」

「は、ア、どういふ理由です」

「その理由が先生、猶更ら妾の身にとつて、堪へられない苦痛で御坐います、もし先生が今、仰しやツた美人局といふやうな、單純な事であれば先生、いくら残忍な良人にも多少の後悔を與へられますから、結局、これほど苦しい事も御坐いません、妾が良人に欺かれて居た如く、妾の良人が先方の夫婦に欺かれて出来た事なれば先生、決して怨恨も何も御坐いません」

「いはゆる美人局なるものでないとすれば、先方の夫婦は全體、どういふ夫婦です」

「そこで御坐います、先方の夫婦は先生、よほど性格の反した、權衡の取れない夫婦で、その亭主は俗にいふ意氣地なし、わるく申せば男として活動力のない、殆ど馬

鹿に近い人間ですが、その女房は安外また飛び放れた美人で、うき世の萬事に氣の利いた女で、つまり世間普通の目からは、あの亭主に惜しい過ぎもん、とでも申すので御坐いませう、現在、平生に妾へ對しても、をりく溜息を漏らして、自分の不運と亭主の不足ばかり訴へて居りましたから、實は妾の良人でなくとも、自分の亭主以上に出來たものが、もし何等かの動機で近寄れば、無論、必ず、きつと先生、間違ひの起るべき女で御坐います、加之も根が系統の賤しい品性の低い無教育の女ですから、人に過ぎた容色と小才のあるだけそれだけ猶更ら自分の亭主に絶えず不満を抱いて、その不満の消滅を頼りに他へ求めたものかと存じます」

「なるほど、品性の下ツた女としては、よく世間にある例ですな」

「ところが先生、不幸な事には妾の良人もまた妾の性格と理想に反した、いはゞ物質的たゞ一點張の人で、世間の普通以上、衣食住の贅澤さへ與ふれば、その外に何を

しても構はない、それで妻なるものに不足のない筈と、いふ人間ですから、どうしても勢ひ、平生に妾へ對して、それより上の愛が御坐いません」

「は、は、は、困りましたな」

「その物質的の、愛、實は愛といふもので無いと思つて居りますが、妾の良人としては、やはり愛でせう、その單純な物質の愛が先生、自分の亭主を馬鹿にして常に不足の絶えない虚榮心の強い先方の女房へは、どれほど無上の幸福に映じましたらう、いかに羨ましく思つたでせうか、つまり妾の良人としては、これ以上の妻に對する愛はないといふ、その愛が妾の性質上、あまり嬉しくないから自然、ありがたく思はないところを、先方の女房が自分の亭主に不満の極、もはや恩も義理も人情も忘れて仕舞ツて、捨て、仕舞ツて、申さば妾の良人と先方の女房と同じ性格の一致した點が、互に近寄ツたものと存じます」

「や、わかりました、して見ると、貴女の良人も物質的の人で、先方の女房も物質的の女で、その餘りあるものと足らざるものと、いはゞ有無相通じた次第ですな、しかし雙方に妻あり亭主ある以上、たゞ男、女が有無相通じたでは濟まない、家庭の悲惨、人道の罪惡だ、それを金で泣寝入った先方の亭主は兎も角、貴女としては、その良人に對して今後、どういふ覺悟を持つて居ります、甚だ露骨に立入るが、その姦通沙汰の一段落を告げた後、貴女の良人は今なほ貴女に對つて、生殖器不能といふ残酷な虚偽を事實の上に持續して居れますか」

「先生、それを、その事實を申し上げるまでもなく、その姦通沙汰の一段落を告げました後、妾は、離縁を請求いたしました、もし離縁が叶はねば生涯、別居したいと迫りました」

「たゞ離縁でなく、たゞ別居でなく、その堪へ難き苦痛の極を忍び遺憾なき侮辱を受

けながら、その前後策を付けて置いて其上の請求とすれば、いかにも貴女に無理はない、ところで貴女の良人は、どういふ工合に出られましたね」

「先生、離縁も別居も許してくれません、許さずに置いて、やはり事實は離縁と別居、より以上の苦痛を、今も受けて居ります、のみならず先生、この苦痛の中へ、この悲惨の中へ妾の母親が、義理の親でもなく眞實、この妾を産んだ母が、妾の身を責めに參ります、つまり妾は親と良夫に責め殺されるやうに、生れて來たもので御坐います」

大島院長、ますく、眉を擧めて目を閉ぢながら、いよく、堅く腕を組みぬ、

「貴女の良人が貴女に對する事は、もはや既に、わかりましたが、貴女の母として貴女に苦痛を與へるとは、どういふ理由です」

「先生、うみの親で御坐いますもの、その子と生れて、苦しむ事が孝行にさへ、なりませれば、どんな辛い堪忍も致しますが、妾の母は、出来る孝行も、したい孝行も、さしてくれません」

「はてね、出来る孝行を、させない、したい孝行も、されないとは」

「たとひ三度の御飯は、いたゞかすとも日に一升以上の酒を飲んで、いくら着せても仕送ッても年が年中その身に縋縋を纏ッて、酔へば誰彼なしの相手、喧嘩口論、醒めた時は弄花の賭博より外に藝も能もない人間、それで今年六十一といへば先生、どういふ賤しい下等社會に持て餘された泥酔老爺かと、思召しませうが、實は先生これが妾の母で御坐います」

「ふむ、貴女は實際、さういふ人の子ですか」

「嘘にもせよ子でない、母でないと申し上げたう御坐います、眞實、産んだ母に相違

御坐いません、生まれた子に違ひ御坐いません、その母が先生、せめて遠國にでも居りますれば、まだしも、無理な手紙で責められ出来るだけの金を送ッて濟みますが、この東京に居られて、三日目か五日目には必ず、わざと見苦しい風俗で妾を苦しめにまゐります、泣いて拜むやうにすれば、するほど猶更ら押掛けて来て、内々そつと妾へでも、いふ事か、さらぬだに、妾に愛のない良人へ對うて、加之も良人に來客のある時は却ッて僥倖に、大きな聲で、先生、お察し下さい、もしこれが今の地位にある良人へ嫁した妻なら、すぐに叩き出されて結局よいかも知れませんが、先刻も申し上げました通り、不束ながら良人を今日の地位に致しました事に就いては、良人に關係の方々は、いづれも能く御存じですから、いくら離縁を迫ッても別居を迫ッても許されない、その良人に一年半も欺かれて姦通の後始末までさせられて一句も出ない妾は、實のところ、かういふ母があるためで御坐います、この母さへな

くば、いかに何でも、かくまで残忍の所爲を受けた良人の下に、生きながらの屍とはなつて居りません、つまり妾は、ありとあらゆる世の中の不運に縛られて動きの取れない上を、良人のために殺され母のために殺されて居りますが先生、この死骸を、どうすれば、どこへ葬れば、よろしう御坐いませう」

良人のため母のため精神的に殺されて、もはや現世に生甲斐のない此屍を、いづこに葬りませうかと問はれし大島院長、おもはず容を改めて我にもあらず俄に嚴肅の態度を示しぬ、

「不幸も不幸、不運も不運、實に悲惨の極ですが、生きた人間として存在すればこそ苦痛も煩悶もある筈ですが、既に良人のため母のために殺されたといふ貴女は、そのまゝ殺された覺悟で居られませんか、つまり貴女の言葉で屍になつたといふ、そ

の屍となつた以上は貴女の無い道理だから、どこへ持ち運ばれようが、どこへ葬られようが、もはや他に向うて訴へる事は無いぢやアありませんか」

「先生、そりやア先生、あまり残酷で御坐います、さなぎ良人と母に苦しめられて、この上の遺憾なき残酷な目に逢つて來た、いや現在まだ逢つて居る身ですから、せめて先生に」

「そこだ、その點です、もはや殺されたとか、死んだとか、屍とかいふ貴女の言葉を其まゝ受けて、不本意ながら今のやうに冷かな御返答をしたが、なアに現在、まだ身に苦痛を感じて他に残酷を訴へられる餘地のある以上は、殺されて居ない、死んで居ない、どうせ楽しく嬉しく生きて居られませんが、辛くとも悲しくとも、貴女は確實に生きて居られるんです、決して屍ぢやアない、先刻より段々お話しのお話を聞くに、つまり貴女は教育があつて、生來の神経が過敏で加之も萬事に負け嫌ひの

勝氣な點があるやうだから、なるほど苦痛は堪へ難い苦痛に相違ないが、その苦痛を實際の程度以上に、いはゞ婦人の通有性を過度に飛び越えて、あまり深く激しく感じ過ぎる點があるらしい、ぶツても叩いても音のない痴鈍は猶更ら困るが、また自分の大切な神経を間斷なき人生の事々物々に觸れて、寧ろ迫られて、おまけに代價以上の支拂を仕過ぎて困りますよ、人の頭腦は實に油斷のならない危険なもので、精神病者の十中八九は收支相償はざる銀行の内部と一般、つまらない事に資本金を出し過ぎるからです、人間の豪いとか強いかいふのは、つまり尠い資金で巧みに多く高價な物を買ひ入れるやうなモンですから、なるべく氣を大きく持つて、世の中を悲觀せぬやう、無理にも樂觀的の方面に、無理といへば無理ですが、人は習慣性の動物だ、始めは嫌でも強ひて其方面に向へば、いつの間にか自然と近づきますよ、まゝならねばこそ浮世なれといふ俗諺は、古昔より幾多の苦痛と悲慘を音もな

く引き受けて居りますから、ちよいと試みに貴女の不運を投じて御覽なさい、案外に底が深いやうですぜ」

「どう致せば先生、妾の不運を投じられます」

「さ、その投じ工合が、これから貴女に教へませう」

聞くだけの事情も聞き終りし後、あらんかぎりの同情を寄せし後、もはや運命の外に解釋の餘地もなく、もはや涙の外に慰むべき言葉も無ければ、暫し眼を閉ぢし大島院長、こゝぞと思ひ切つて最後の斷案を下しぬ、

「つまり人間といふものは、何等か常に絶えず外來物に刺戟せられて、これと戦はねばならない筈の約束に生れて來たものだから、どうせ苦しい方が多い、とても生涯を通じて快樂ばかり取る事は出來ないが、貴女は今日の其苦勞の多少問題でなく、

程度問題でなく、たゞ絶對的に苦しめらるゝのみで過去にも將來にも一點の楽しい光明が無いといふんでせうね」

「無論、先生、そこで御坐います、苦樂相半するといふやうな、贅澤な事は到底私の運命として望みません、また快樂、少くて苦痛の多いぐらゐならば、先生、世間普通、まして良人で御坐いますもの、母で御坐いますもの、妻として、子として、堪へ得らるゝだけは堪へますが、現在また今日まで堪へてまゐりましたが」

「もはや、どうしても貴女は堪へ切れませんか」

「はい」

「や、わかりました、いよく堪へ切れないとすれば、良人に對する妻でなく母に對する子でなく、貴女は貴女、たゞ一個の婦人として、ここに何の關係もない一個獨立の婦人として、自分の思ふがまゝに處決する外アない」

「どう處決いたせば、宜しう御坐いませう」

「最も卑近に苦痛を脱せんとすれば、貴女、總ての婦徳を抛つて、墮落なさい、もはや貞も孝も不用だ、いたるところ手當り次第に身を持ち崩して、好きな男でも拵へて思ふがまゝに墮落するが宜しい、また最も高尚に苦痛を脱れんとすれば貴女、總ての煩悶を捨て、宗教界に身を投じなさい、人間の救はるべき道は人間以上の神に取縋つて慈愛を求むるより他に道がない、もし墮落が出来ず宗教にも這入らないとすれば、さういふ時に幸ひ人間といふものは頗る都合よく出来て居る、強ち自然の老衰を持つて斃るゝに及ばない、いつ何時でも人手を借らず死ねますよ、自殺なさい、どうせ來るべき死を早めるのみだ、鐵道往生、刃物三昧、水の底へ飛び込んで木の枝に吊下つても、そりやア御勝手だ、つまり貴女として貴女のいふ如く、もはや妻として子として逆も堪へ切れないとすれば、以上たゞ三個の方法あるばかり

だ、墮落するか宗教に救はるゝか自殺するか、どうなさる、もし今後、なほ堪へらるゝ餘地ありとすれば、さらに氣を大きく持つて、心を廣く持つて、良人と母のため泣かず叫ばず、不幸の極と不運の極より絞り出す貴女の眞心で、その良人と母を感化して御覽なさい、これ以外、貴女に呈する言葉はない、これかぎり失禮ながら再び貴女の事情を聞く必要がない、いづれを取らるゝか、撰擇の覺悟は貴女にありますぞ」

大島院長、ぬツと其まゝ立ちて、あとも見返らず室外へ去りぬ、

院長の大島逸平と副院長の塚原要藏、今しも午餐を終へて互にシガラの煙を吹きながら、身も心も打ち解けての談笑、俗にいふ樂屋談話なり、

「院長、今の婦人は随分、長く時間が取れましたね、どういふ筋です」

「つまり家庭の煩悶だが、なか／＼悲惨の事情が混み入つて出来事が單純でないところへ、本人に多少の教育があつて、加之も情より理の勝つた女だから聊か面倒だったが、まだ情よりも理の勝つた女だけに寧ろ最後の斷案は下し易かつたね」

「はゝア、いかにも、その點がありますね、情と理と、いづれか一方へ傾けば既に中心を失つてから、その傾いた方面を押し上げて元の地位へ捻ぢ直せるが、情理ともに平均して常識に飛び放れた奴は到底、無効ですな」

「なアに、それにしても人間は生死の二途あるのみだ、生きてる奴に對つて死といふ問題を擔ぎ出し、死にたいといふ奴に對つて何等か生きる方法を與ふれば十中の八九、まづ大抵の事は解決するらしい、塚原さん、當院の秘訣は萬事一括して、こゝさ、こゝですよ、この點を心得て置いて貰ひたい、つまり人は最も手近な見易い道理に最も迂遠く深く迷つて煩悶するモンですからね、はゝゝゝ」

「なるほど、は、は、は、いは、人間生死の境を示した目標ですな」

「さやう、世の中に方角を失って、どこへ行かうかと迷ッてる人間のため、右左、さア生きるか死ぬかといふ最後の決心を促す目標ですよ」

「しかし院長、右へも行かず左へも行かず、その目標の前に立往生して、生きてくもない死にたくもないといふ奴は、どう取扱ひませう」

「それが即ち入院患者だ、ほんやり目標の前に立たして置けない、當分まア病室へ入れて、ゆるく療治してやるのさ、だが塚原さん、その間に精神病院と煩悶病院の區別を立てる必要がある、つまり常院は常識と狂氣の中間で、精神病院は既に腐り切った人間を收容し煩悶病院は將に腐らんとする人間を救ふんだから、實に面白いよ、頗る趣味がある、もし牛肉でいへば、あまり新しくて不可ない、あまり古くて不可ない、堅くもなし臭くもなし、こゝ一日で腐るといふ最も美味のあるところ

だ、は、は、は、は、は、は、は、

をりしも室外より慌たゞしき小使の聲、

「先生々々、どちらか御一方、急に來ていたゞかないと困ります、大變な奴が來て居ります、べらぼうめ、錢を出して待つなア宜いが無價で人を待たすといふ事があるか、さア乃公を一番に療治しろッて、嘔鳴り散らす亂暴な奴が舞ひ込で居りますから」

きくや否、塚原要藏、すツと立ちぬ、

「そいつ、僕が當らう」

煩悶病といへば十中の八九、いづれも生氣に乏しく活氣に薄く、陰に閉ぢられて悄然と打ち沈むもの多き中に、これは案外また陽に開き過ぎて嘔鳴る奴一人、俄に患者の

待合室を騒がせぬ、

そいつ面白いと副院長の塚原要藏、診察所に呼び入れて見れば、ほろ半被に身を纏ひ破れし半股引に毛脛を現はして、土方でもなし車夫でもなし、職人でもなく立ン坊でもない四十男、うろく、宵闇の軒下を歩けば必ず巡査の厄介になるべき風體ながら、人相の割合に何處やら罪の無いらしい奴なり、

「この病院の先生といふなア、汝さんですか、だしぬけに何も不足をいふンぢやアねエンですが、實アね、馬鹿な面アして今朝から茫然と待つてるンですよ、もう午後三時だらう、考へて貰ひてエ、身體に閑暇があつて飯の喰へる人間ぢやア無えンですからな、働いて生きてるんだ」

塚原副院長、おもはず満面の微笑、

「は、ア今朝から、それは氣の毒だ、なるほど、その日を働いて生きてる人間ぢやア

少しの暇も潰せない、小使に氣を付けさせば宜かつたに、すまない事をしましたね」
 「さう何も先生、さういはれて見ると此方が濟まねエよ、は、は、は、時に先生、わツしも随分、これまで人に負けねエ氣で、いろんな眞似をして、まアどうか斯うか不思議に野倒死もせずさ、やつて來た事ア來ましたがね、もう無効だ、いよ／＼不可ねエ」

「どういふ工合に無効だ、いよ／＼どういふ工合に不可ない」

「そりやア無理だ先生、どういふ工合ツて、その工合が分りやア分別の出る道理で、いけなくも無効でもねえンですが、何を稼いで宜いか、どうして宜いか黒闇の寢惚ツ面で、わからねエから困るンでさア、兎も角も先生、助けて戴きてエ、實ア手も足も出ず、かはいさうに、めんくらツてますよ」

「ほ、ほ、その助けるに付いても、事情を聞かなければ、助ける道がない、たゞ助け

てくれでは困る、全體これまで、何をして居ました」

「鼠でさアね」

「鼠」

「人間を相手にしちやア、いちく〱癩に障って、むかッ腹の立つばかりで、ろくな事ア無エンですからね、鼠を捕って居ました」

「まるで猫だな、は、は、は」

「なアに猫ぢやアねエ、わッしの名は虎吉といふんですよ先生、この鼠もベストの盛な時は一疋が五錢で、わッしは當った事もねエが大した鬪があつたから自然と氣が勇んで随分わるくねエ職業になりましたが、此頃ぢやア、たゞの三錢で加之も福引なしさ、おまけに寒中と来てますからね、捕る方に骨ばかり折れて、奴さんは穴に巢籠りしたまんま出て來ねエ、どこの溝へ張っても泥溝へ掛けても無効だ、一時は

日に三十疋も占めて三五の一圓五十錢にもなつたものが、今日ぢやア三錢の割合で八九疋が關の山だ、これぢやア先生、いくら眞ッ黒に泥を浴びて稼いでも働いても、だらしのねエ山の神に三人の餓鬼を控へて、どうなりますい、戲談ぢやアねエ、是非こゝは一番、本氣の沙汰で助けて貰ひたエ、實ア今日だつて先生、さんざ朝から待たせられ、御蔭で、いやな事をいふやうだが、鏝一文にもなつちやア居ませんぜ、どうかして貰ひてエ」

猫でなく虎吉といふ人間の鼠捕、ベストの消滅と共に鼠の相場も下りしのみか、寒中の巢籠りに一日八九匹が關の山、これでは食へぬ、どうかしてくれといふ愁歎面、「眞實だ先生、どうかして貰ひてエ、きけば金でも戀でも何でも凡そ人間それがために困ッてる奴を、助けるといふ病院ぢやアありませんか、ところが先生、わッしは別段、さう大した金の御無心するでもなしさ、ねエ、また今更この年になつて色で

も戀でもあるめエし、そこア正直だ、見たまんまの人間相應に決して贅澤な御願ひはしませんよ、たゞ親子四人が、満足でなくとも、どうか斯うか其日を食へるやうにして貰やア澤山だ、なアに其うち夏が来てベストが流行り出しやア、また此方の世界だ、よし一番鬨に當らなくツても、きツと何か手土産をぶらさけて御禮に上りますさ、ちよいと今、この冬場だけのこツた、ねエ先生、どんなもんでせう」

流石の塚原副院長も聊か閉口の體、

「は、困ツたな、いや話は、よく分ツてるがね、實は取扱ひに困ツた、は、は、は、」

「わからねエ相手と違ツて、話が分りやア先生、何も困る事アねエ筈だ、わざと難かしい無理をいふぢやアなし、さう先生、じらさずに、どうかして下せエな」

「いや、あまり分り過ぎて困るんだ、いは、殆ど問題にならないよ、少々、むづかしい混み入ツた無理のあの方が却ツて扱ひ易いよ、は、は、は、しかし折角だから相談に

乗るとして、その鼠を捕る外に何か藝がありますかな」

「かはいさうに先生、これでも男の端に生れて来た人間だ、時と場合で仕方がねエから、やるもの、何も自慢で鼠を捕るのが、わツしの習ツた藝ぢやアありませんよ」

「こりやア悪かつた、は、は、は、ところで親子四人どうか斯うか其日を送るといふ、その送り料は全體、どのくらゐ入りますね」

「さうさね、ろくなものア食はないにしろ、やはり野宿もせずに生命を繋いで兎も角も生きてるんですから、どうしたツて日に三貫の錢は入りますよ、たまに生臭い小肴の骨でも残す日にやア是非、四貫の上へ飛び跳ねまさアね、ところへ此宿六が氣でも狂ツて、ほろ酔機嫌と來りやア山の神と三人の餓鬼は一日の干乾だ」

「なるほど、その中で酒を飲んぢやア堪らない、まして三人の首枷を抱へた山の神との、定めし苦勞だらう」

「ところが先生、わツしの鼻アは變な女で、さのみそれを苦勞にして居ませんね、實
ア互に好き合ッて、かうなツな夫婦ですからね」

「おい／＼、のろけては不可ない」

「なアに先生、のろけるンぢやアねエが、まア聞いて下せエ、そも／＼の成立から、

お談話しないと分らねエ事があるンですよ」

鼠捕の虎吉、鼠の事よりも自己が鼻アの事を問はれて、何とやら俄に聲を潜め面を押
出し目を剥き出しぬ、

「先生、たゞ一口に山の神といふが、この山の神にも随分、いろンな山の神があるも
ンですよ、ところで先生、わツしの鼻アは全體、どんな鼻アだと思ツて居なせエま
す」

「は／＼／＼／＼わからんね、まだ見た事がないから」

「見た事がなくツても、その亭主が現在、かうして日の前に居るンだから、おほよそ
見當が付くでせう」

「親子とか兄弟とかいへば、また想像の及ばン事もないが、夫婦は血統の違ツた他人
だからね」

「その他人が先生、親子兄弟よりも實ア縁の深エ夫婦になるンだもの、猶更ら分る筈
だが、困るなア、それぢやア話が出来ねエ」

「いや、出来ない細君の話に強ひて聞く必要もないが、つまるところ、けふ當院へ來
たのは當分、寒中の間、思ふやうに本業の鼠が捕られないから夏が來てベストでも
流行り出すまで外に何か、比較的、骨の折れない業で食ふ道を教へてくれといふ
ンだらう」

「幾ら食へなくツても先生、そいつア酷い、鼠と鼻アが一個になりますかね、まア兎

も角も聞いて下せエ、實ア先生、わッしの鼻アは長屋中で、わッしに過ぎた女房だといふ評判ですぜ、その評判も先生、きのふ今日の沙汰ぢやアねえ、そもく夫婦になつた最初ツから、や、友達の奴等、うるさく騒ぎやアがツてね虎の野郎、うめエ事をしたとか、あの鼻アが無價で来たのが不思議たとか三年無事に辛抱するだらうかとか、は、は、は、無理もねエよ先生、眞實その通りだからな」

「眞實その通りの鼻アが、どうしたといふんだ」

「どうもしませんやね、どうかされて堪りますかね、うそ虚偽のねエ證據には、わッしの種を宿して食ふや食はずの貧乏中で痛え腹から二人の餓鬼まで放り出した鼻アですよ」

「は、は、は、なか／＼貞女もンだね、大事にしなさい」

「そこで先生、さう思やアこそ、この大の男が、犬猫も這入らねエ泥溝や溝の中を朝から晩まで搔き廻して、わづか五錢か三錢の鼠を捕って、一生懸命まッ黒になつてどうか斯うか其日を養つてるんですよ、考へて見りやア、どうした何の因果か、この廣い世の中を撰りに撰つて先生、かはいさうに、わッしのやうな亭主を持たなくツても濟む筈に出来てる女ですからね、よし大した希望はないにしろ、春秋に花が咲いて演劇も料理屋もある世の中だ、襤褸を纏つた素肌乳香兒を脊負つてさ、片手に泣いて喚く餓鬼を引き摺りながら、あまる片手に一貫か二貫の米や薪を提げて歩きたかアねエでせうよ、先生、一人の母親が死んだ時せエ辻車は儲置き、あの便利な電車にも乗らず、てく／＼駈けて往つた女ですよ、それを思ふと何故まア、わッしの鼻アになつたかと考へてやりますよ、と言つて、他人の錢で車にも電車にも乗せたくねエ、虎の野郎に過ぎるもんだ過ぎもんだと聞く毎に先生、道理だと承知しながらも實ア氣が揉めて堪りませんよ、いくら鼻アの方に間違ひがなくツても、

あまり有難くない亭主に連添った身を間違ひのありさうな奴等が四方から取巻いて岡焼半分わい／＼と騒ぐんですからな、危険でなりませんよ、先生、この上の慾は望まねエ、たった一年で澤山だ、運よく捕捉らねエ盗賊でもして、嗅アにも餓鬼にも思ふ存分、さんざ好きな衣裳も着せ、美味エ食物も食はせて景色の宜い旅の空でも見物さした後、親子四人で先生、死んで仕舞った方が生甲斐もねエ生命を長らへて面白くねエ浮世に苦しむより、遙に優だ、どう考へて見ても此ま、藻掻いて居たいたア思ひませんよ、あ、嫌だ、嫌だ」

たゞ馬鹿扱ひに笑ひながら聞き居たりし塚原要藏、おもはず俄に何をか恐れて容を改め、じろりと其顔を打守りぬ、

凡そ人間の怖ろしきものは才子の策にあらず智者の智にあらず悪黨の企謀にあらずして、ほつと突き詰めし馬鹿正直の一念にあり、今こゝに鼠捕の虎吉、たゞ山の神に恍

惚き宿六と思ひの外、その恍惚さ加減が度を越えて嫉妬に變じ、その妻に對する愛の極は世の中に於ける不安の極となり、その日を食ふや食はずの貧乏世帯は破れかぶれの自暴自棄となりて、もし一年榮華の夢さへ見れば親子五人の生命も入らぬといふ言葉に、塚原副院長おもはず眉を蹙めて其顔を打守りぬ、

「なるほど、なるほど、いや、よく分つた、どうせ面白くない世の中を細く長く生きて居るより俗にいふ太く短かく、一時に樂んで百年の苦を脱れたいといふ理由だね、つまり盗賊してでも嗅アや子どもに生涯一度の榮華をさしてやりたいといふんだね」

「さうでさア、もう先生、世の中が嫌になりましたよ、いくら一生懸命に溝泥鼠を追ひ廻したって親子五人、逆も満足に人間らしい生命の繋ぎやうがねエンですから、思ひ切つて地獄の釜の上を一足飛だ」

「うまく飛べるかね」

「そりやア其時の運次第だ、もし飛び損へば釜の底へ落ちるばかりだ、仕方がありませんよ」

「自分は其時の運次第で、仕方がないにしても、鼻アや子供は何とか仕方のあるやうに、して遣らなければなるまいぜ」

「だからさ、一年か半歳、この世に念の残らねエやう思ふ存分、さんざ贅澤さした上で、鼻アも子供も一氣呵成に殺してやりませアね」

「その二年か半歳は、うまく盗賊の出来た上だらう、もし出来ない前に捕捉れば、どうする」

「さア、そこですよ、そこを先生、何とか工夫ありますまいかね」

「ふむ、いよく本氣に、やる決心かね」

「實ア先生、わッしだッて善い事と悪い事ア知ッて居ますよ、盗賊なんかしたかアありませんがね、もし出来るなら、いつまで泥溝鼠を追ひ廻して生死の境目に苦むより、いッそね、自分の身體を、ねエモンにしてでも、鼻アや餓鬼の樂になる工夫は、あるめエかと考へるんですよ」

「さうだらう、まさか最初から盗賊が目的でもなからう、たゞ苦しませの餘儀ない結果、たとひ盗賊をしても鼻アや子どもに樂をさしてやりたいといふ理由だらう、しかし實際また外に手も足も出さず、いよく本氣の沙汰に盗賊する決心なら、する方法を教へてやるよ」

「えッ、先生、そりやア先生、は、は、は、戯談でせう」

「いや、戯談でない、眞實だ、實は乃公の朋友に大盗賊があつてね、豫々その秘訣を聞いてるよ、どうだ、出来れば遣るかね、やれば内々そツと其大盗賊に引合してや

らう、なアに働いて正直な金を取るか、たゞで横着な金を取るかの相違だ」
塚原要藏そろく逆療治にかけて、この患者いかなる顔色を呈するか、その態度を窺ひぬ、

「どうだ、いよく、やるかね」

鼠捕の虎吉、おもはず目を剥き出しながら首を締めぬ、

「さアどうだ、いよくやるかと念を押されちやア困りますが、ねエ先生、やッても、ようがせうか」

「善い悪いより寧ろ、うまく出来るか出来ないかといふんだらう、つまり面白くない世の中に食ふや食はずで泥溝鼠を追ひ廻すよりは、いつそ盗賊でもして鼻アや子どもに生涯一度の榮華をしてやりたいといふんだらう、事の善悪は既に取ッて退けての餘儀ない理由だらう、なるほど泥溝鼠を追ひ廻す人間が今日の激しい生存競争に

追ひ廻されちやア堪るまい、日夜間断なく襲ひ来る生活難の壓迫に堪へられないのが當然だ、生きて甲斐なき苦痛の結果、もはや死を待つより外にないが、せめて其死の前に一度、人間らしい境界を妻子に得させたいといふための盗賊、こりやア盗賊する奴の盗賊でないから罪が軽いよ、軽い罪のため重い人間の親子五人が死を決しての盗賊や、無理はない、大きく云ッて四海兄弟の有無を通ずる一時の方便だ、人の物を盗んで其まゝの猫糞に濟まさうとするから宜くない、なアに盗賊した後で此世を去るといふ死の覺悟さへありやア自然の申譯が立ッてるよ、罪も報いもあるもんかね、やるべし、やるべし、遠慮なく思ひ切ッて盗賊しろ、幸ひ今いふ通り乃公の朋友に大盗賊があるから引合してやるよ、は、は、は、」
鼠捕の虎吉、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、ばちく目ばかり剥き出せば、塚原副院長、いよく聲を潜めて語り出しぬ、

「どうだい、やるかね、やれば今、すぐに其大盗賊へ引合さう、早速今夜から始めるが宜い」

「先生、わッしは、まだ、やるか、やらねエか決意ませンが、その大盗賊といふなア全體、どういふ人です、どこに居るンです」

「實はね、當院に居るンだよ」

「えッ、この院中にですか」

「さうさ、うかく、人に漏らしちやア困るがね、實のところこの院長だ、秘密中の秘密、この大島院長といふのは、それだよ、儲かう打ち明して以上は、もう脱さない、もう動きが取れない、否でも應でも盗賊さすから、たとひ死なくツても既に死んだものと見て、するものと見て今こゝへ院長を連れて来るぞ、もし院長の面前で、をかしく變に二の足を踏み出すと貴様、無事に歸れない事が出来るぞ、暫く待ツて

居れ

ずツと其まゝ立ツて室外へ飛び出すや否、がちりと音高く入口の扉を閉しぬ、

鼠捕の虎吉、自己が鼠捕器に掛けとれたる如く、一室に閉め籠まれしまゝ出るにも出られず、この院長が大盗賊とは、いかにも不思議の至極、もし欺して置いて巡査にでも引渡さるかと思へば、俄に薄氣味わるく腕を組んで茫然とせる背後より入口の扉を開けて靴音高く、例のブラシ髭に目鏡越の眼を光らす大島逸平、加之も突然の大

盗賊したいといふのは、汝かね

「じよ、じよ、戲談ですよ戲談でがすよ、いくら何だツて盗賊をしたいと、わざと、此方から頼んだ理由ぢやアねエンですが、今こゝから出て往ツた先生が、無理に盗賊しろ盗賊しろと仰しやるから、つい、その氣に、いやまだ實ア其氣にもなツちや

「ア居ませんよ、とんでもねエ、人を馬鹿にしてらア、は、は、は、」

「おい、おい、たゞ笑って済む事と思ってるか」

「へエ」

「へエではない、現在、自分の口から盗賊をして親子五人が生涯一度の贅澤をしたいというたではないか、のみならず一年か半歳、その盗賊金で贅澤を盡した後、妻子を殺すとまで、たしかに言ッたらう、だから此奴、危険な奴と見て取ッて、わざと汝を引き付けた理由だ、實のところ乃公は大盗賊でも何でもない、寧ろ警察と或方法を以て聯絡を通じて居るくらゐだ、第一また汝の人相が、どうしても正直らしく受取れない、もし盗賊する氣になつて出来る場合があれば、やりさうだぜ、實際まだ人の物を盗ンだ事がないか」

「たゞ旦那、旦那、親子五人で年が年中の空腹を抱へちやア居ますが、この年になる

まで塵一本、人様の物を、目にも觸れた事ア御坐いません、どうか旦那、この邊で御勘辨を願ひます、今の方にだッて、わッしの方から何も、實ア言ッたんぢやアねエンですよ、いはせられたンですよ、かはいさうに、根が馬鹿ですから、うッかり乗せられツちまつたンでさアね、や、この後は、これに懲りて旦那、手に取るまで外ツ氣を移さず一生懸命、眞面目に神妙に、うぬが性に合ツた泥溝鼠を追ひ廻しますから」

「眞實かね」

「眞實です旦那、かういふ酷い目に逢ッた事アねエ」

「いや、眞實なら、それで宜い、こりやア實際の統計だがね、おおよそ盗賊して監獄へ這入ッてる奴に、あれだけの苦役が、一日平均二十錢に割當るものは無いさうだ、また今日の世の中は昔日と違ッて銀行といふ便利な倉庫があるから、どんな家でも、

金を多く扱へば扱ふだけ百圓と纏まつた現金を置く筈がない、ね、だから勢ひ物品を盗んで直ぐに捉捕るんだ、また監獄で働く半分の苦役を獄外で正當に働けば、いかなる仕事をしても日に五十錢以上は、きつと取るから、どう考へても盗賊は差引勘定に合はないもんだ、また人間には人間相應、奈何せん癩に觸るが致方なく、それぞれの運命といふものがあつてね、まづ世間普通の状態、智慧や工夫で、さう自由になるもンぢやアない、人間の智慧と工夫は、數の知れ切つたもので、いはゞ自然に来る運命を早く引付けるぐらゐのこつた、わかつたかね、其うち氣を變へて、また來なさい、盗賊するよりは、もう少し手數も心配もなくて割の宜い仕事を教へてあげるからね、まづそれまでの間は、あまり自慢にもなるまいが手に馴れた鼠を捕るに限る、いくら不足はあるにしろ、鼠を捕つて今まで飢死もしないぢやアないか、東京中の鼠を捕り盡して一疋も居らなくなれば、その時こそ算盤も勘定も入らない、

盗賊しても宜いがね、まづ當分、さういふ損な仕事にかゝつては不可ないよ」

鼠捕の虎吉と入れ替りて、靜に音もなく現はれしは年輩二十四五の小男、ちよいと遠目に色白優形の美男めけど、人間の血色を失うて骨と皮ばかりの吹けば飛びさうな體量、凡そ十貫目もあるか無いかの覺束なさ、無論、徴兵検査の時は問題にも入らずして其まゝ摘み出されしが、醫者の研究問題には生涯いつ何時でも合格すべき體、さりとて營養不充分といふでもなく現在、疾病あるでなく、これを上品にいへば天性蒲柳の質、これを實際にいへば憐れむべき男子一人前の生れ損ひ、羽織は大島まがひの紡績飛白、襟垢の光りし伊勢崎銘仙に袖口の擦り切れし紀州ネルの下着を重ねて、もはや伸び縮みのないメリヤスの竹筒に等しき古シヤツを纏ひ、繩の如く糾れたる袖絞りの兵兒帶に爪頭の食み出でし紺足袋、定めし下駄は上汐の吹き寄せに似たるべし、奈

何せん浮世の浪風に乗り切る力もなく勢ひもなき身を悄然として椅子に凭せ、愁然として瘦せたる額に神經過敏の青筋を現はしながら、活氣を失ひし無言のまゝ目を閉ぢて差俯きぬ、

大島院長、じろりと例の眼鏡越、

「貴君は」

「僕は、雲峰です」

「ウンボウ、お名前ですか」

「雅號です」

「どういふ文字を書きます、失禮ながら御職業は」

「雲の峰と書いて雲峰です、既に雅號といふ以上、これを單に職業と見られては、困ります、文士です」

「ブンシとは」

「文士とは文士です、文を以て生命とするもの、文學者の事です」

「は、ア、なるほど、此ごろ流行る文學者ですね」

「院長、變に妙な語氣を用ひられますな、いやしくも文學者といふ冒頭に、此ごろ流行るとは」

「いや、別に語癖を設けた理由ではない、つまり此ごろ世に尊敬せらるゝといふ意味で、つまり重く迎へらるゝといふ意味で、これを只お心易く流行ると申したのは、いかにも野卑に聞えて悪かつた、あらためて取消しますが、しかし貴君、何等か當院に要求、いや要求の一語、また御氣に觸るかも知れないが、もし何等か當院に期するところあつて來られた以上、いちくさう言葉の揚足を取つては困りますよ、は、は、兎も角も煩悶病院に對する文學者雲峰先生の事實要件、事實要件も呵しい

が、なるべく無用の辯に互らす要領の本點に移りませう、まづ第一お聞き申して置きますが、いはゆる今日の文士とは、數の上に於て多くの場合、小説家の事でせうね」

「さうです、現に僕も其、その小説家の一人です」

文士と稱する雲峰、みづから現代に於ける小説家の一人といへど、家は片々たる雑誌のバラツクに相住居の外、いまだ一部の出版物として洛陽の紙價に關せし事なく、をりをり滞り勝の下宿料に關して凡俗の侮辱を加へられ、さらぬも枯れたる腸を天下知己なきの歎に絞り果て、鏝一文の工夫も付かず、せめて半月分を持つて歸らねば、いよく今日こそ宿を追ひ出さるゝといふ日なり、

大島院長、ますく眼鏡越の眼光を輝かして、蒼く瘦せたる雲峰の面を打守りながら、殊更に慇懃の口調、

「凡そ世の中に執る業も多いが、まづ貴君の如きは人間幸福の頂上、うるさい現實の物質に殆ど用がなくて、常に高く清い幽玄の理想界に居らるゝんだから、定めて社會の事々物々が見るにも聞くにも堪へない、卑しい淺ましい、なさけないものに思はれるでせうね」

「そりやア無論、さうですが、一方には文士またパンのために生理的存在を繋ぐ必要上、遺憾ながら餘儀なき場合は、をりく卑近な物質問題に近づかざるを得ない事がありましたね、どうも困ります」

「は、ア、やはり貴君方でも、さういふ場合がありますかね、野卑な我々の想像では一切、すべて社會の物質外に立たるゝものとはばかり信じて居ましたが、なるほど、さうですね、木や金で作った神佛にさへ食物を供へるんだから、まして生きた人間だ、いくら文學者でも小説家でも食はなければ死ぬ外アない、つまり現在眼前のバ

ンが已むを得ざる事實の先決問題です、ね、は、は、は、と、ここで其先決問題は平生、どういふ工合に、どういふ程度で、處理せられますか」

「實は院長、その點で、その事で、來たのですが」

「その點とは、パンですね、その事とは失禮ながら、そのパンを得る道のない事もないが、まづ骨が折れて困るといふ理由ですか」

「露骨にいへば、まアさうです」

「露骨が宜しい、世の中の實際は皮肉の言葉で行はれませんからね、時に貴君の御家族は幾人です」

「まだ獨身です」

「獨身、お一人ですか」

「下宿屋に居ます」

「ふむ、他に系累のない獨身で生活に世話のない下宿屋住居、お氣樂ですな、しかし其貴君がパンといへば、たゞ一人の下宿料ぢやアありませんか」

「その下宿料が、甚だ面倒で、困るんです」

「何が面倒なモンですか、立ん坊の木賃宿でなし、まさか日割で毎日、支拂ひする筈も無いから、月の最初か最終に一度、その一月分を拂へば済むでせう」

「それが院長、なか／＼容易に済まないから困るんです」

「は、は、は、として見ると困るのは貴君でない、寧ろ下宿屋が困るんだ、下宿屋の方からいへば貴方は飯盜賊だ」

「飯盜賊」

「さやう、飯盜賊だ」

大島院長の眼鏡越と雲峰の眼鏡越、互に一種異様の光輝を放ち合ひぬ、

實際いまだ世にも人にも許されず、たゞ自己ばかり其氣の雲峰先生なれど、苟くも文學者を以て任じ小説家を以て居るものが、下宿屋の飯盜賊といはれては侮辱の極點、くわツと満面に朱を濺いで怒るべき筈ながら、あはれや元來が骨と皮とに瘦せこけたる貧血性、ますく蒼白き面は神經過敏の青筋のみ立て、機關人形の電氣に打たれたるが如く、五體ぶるくと震ひ出しぬ、

「院長、る、院長、僕を飯盜賊とは、どういふ理由で僕が飯盜賊です、下宿屋住居の文士は僕一人でない、廣き意味に於て文學に對する侮辱だ」

大島院長、悠々たる態度に例のブラシ髯を撫でて満面の微笑、

「廣き意味に取ツても狭き意味に取ツても、そりやア貴君の勝手だが、さしづめ今、貴君ア自分一人の下宿料を拂ひ兼ねると、いふぢやアありませんか、この拂ひ兼ねるといふ言葉は一の修辭法で十中の八九、實際に於て拂はないものが多い、ところ

で下宿屋は慈善事業でない、最も單純なる營利的として貴君に其食料を拂はれない以上、つまり貴君のため食ひ倒された理由だ、まだ大道の屋臺店で鮫か天ぶらの喰遣けする奴は正直だが、そこで一月二月も寢起しながら食ツたものを拂はないに至ツちやア實に言語道斷、怪しからん太いもんだ」

「いや院長、下宿料を拂はないんでない、をりくその都合上で、拂へないんだ」

「拂はないと拂へないは、貴君の方に取ツて其時の都合上かも知れないが、拂ツて貰へない下宿屋では結局、やはり食はした代價が取れないのだ、いくら清く高い理想界に住んで凡俗の物質外に超然たる文學者でも小説家でも、その物質外の超然を下宿料にまで及ばしちやア、あまり自分勝手に無遠慮過ぎた業だ、は、は、は、いかに無用の長物を養ひ得る社會でも、事實まだ今日の文士なるものを尊敬して、無代で食はして置くほどの雅量がありますまい、は、は、は、全體この文士に對する世間は文

士みづから自己を見るほど重くは待遇して居ませんよ、實は寧ろ風船玉よりも軽く見てますよ、文を作るより田を作れと言ッてね」

「文を作るより田を作れ、つまり富を得よといふんですか」

「いや、富といふものは到底、頭腦の不節調にして性行の放縱散漫なる貴君方の得られるものでない、たゞ自己が生きて居るに就いての餌食を供する小金のこった、よく貴君方の連中は清貧といふ事を自慢にするが、貧にして清きものは非常の豪傑か稀世の君子にある筈だ、僅自己一人の存在に覺束なく下宿料を踏み倒したり乃至また一家を構へて、妻子眷族に味噌醬油の心配さすやうな人間が、清貧の事實を行ひ得るもんか多くは是れ濁貧だ、第一また筆で飯を食ふのが間違ひだ、日本の飯は箸で食ふもんだ、古人の屢々米鹽に窮して貴きは窮する外に於て何等か大に窮せざるものがあるからだ、今の文士に貧乏を自慢するだけの品性と大作物がありますか、

彼等の所謂貧乏は餘儀なく迫らるゝ正當の貧乏でない世間の同情を惹くべき廉潔の貧乏でない悪臭紛々たる糞貧乏だ、つまり貧乏神の方で嫌な氏子を持つたと迷惑して居ませうよ、はゝゝゝわるくいへば貧乏神に持て餘され死神に見放されて、それがために現世に生きてる人間だ、いちゝゝ今その證據を事實の上に擧げて見ませ

う」

大島院長、所謂今日の文士なるものを引ツくるめて一口に押し込み、下戸の空腹に團子の勢ひ、むしやくと喰ひしが、さて眼前に喰ひ残せし雲峰先生、これは案外あまりの不味さに、面を皺めて、手を付けず其まゝ打守りぬ、

「や、聊か大膽に饒舌り過ぎたやうですが、まさか鷲を鴉にしたでもない、鴉を鴉にしたぐらゐるこつたの、大した間違ひはないでせう、はゝゝゝ時に貴君ア今後なほ、文士として、世に立たれる覺悟ですか」

「無論です、今、院長の云はれた議論は平生も我々の耳にするところ、さのみ驚いて珍らしくは感じません、もとより文學は世間の賣買物でない以上、いかに苦しくとも、いかに辛くとも、それがため我々の希望は断ちません、凡そ、世の中に於ける總ての苦痛と迫害に壓せらるゝとも、この文學の赴く中心點は動きません、貧と戦うて道に倒るゝは、人間光榮の極ですからね」

「なるほど、さういへば、實に清くて高い、人生この上もない光榮ですが、實際、あくまで貴君は其光榮を保ち得て其貧と戦へますか」

「實際、戦ひつゝあるんです」

「は、は、實際、現に戦ひつゝあるといふのは、つまり下宿屋の下宿料と戦つてるんでせう、は、は、あまり敵が小さ過ぎる、加之も連戦連敗、めちやくゝに負けてるんでせう、せめて社會に對する生涯の貧と戦へが兎も角、今日か明日かといふ自己

一人の食つたものを拂へないやうぢやア殆ど問題外だ、光榮も品位もあつたものではない、よろしく當分の間は文士を廢めて、蕎麥屋か鮎屋で出前持になつた方が宜いでせう、全體、貴君方は貧の解釋を間違へてる、なるほど文學は不換金物で俗世間に價値を定めらるゝもので無いとすれば、その貧を自己一身の貧に止めて晏如たるべしだ、自己の貧乏を他に及ぼして迷惑をかけちやア不可ない、つまり世間と貧と性質を異にして自分だけの貧を保つが宜い、世の中の俗物どもは鯛の刺身に舌鼓を鳴らしても貴君方ア鹽を舐め菜葉を食つて平氣に居れば、それで濟むんだ、卑しい物質と高尚な理想とは相容れないから、どツちか一方に男らしく決しなさい、第一まだ世の中にも立ち得ない文士の身として下宿屋住居は贅澤だ」

「院長、僕の下宿屋住居を贅澤とすれば、どこに住むんだ」

「下寄料も拂へない下宿屋に住むより、乞食するが宜い、貴君の如き文士には文士相

應の光榮も損せず品位も損ぜない乞食の方法はありますよ、や、幸ひ其方法を教へてあげませう」

いかに名も實もない平凡文士といへど、下宿屋住居は分に過ぎたり乞食するに如かずとは、あまりに、手厳しき外科療治を受けて、むツとせし雲峰先生、ますく額に青筋を立てぬ、

「院長、苟くも文士に對つて乞食しろとは全體、どういふ乞食です、是非とも其、その乞食説を聞きたい」

大島院長、いよく平氣に満面に微笑、

「たゞ乞食しろといへば、なるほど貴君を侮辱するやうだが、實は尊敬の意味ですぜ」

「乞食が尊敬の意味とは」

「人が人に對つて食を乞へは、これ世間普通の乞食で、社會に於ける一種の罪惡物、

人間としての恥辱だから、此上もない無禮の暴言になるかも知れないが、今こゝでいふ乞食は天に向つて食を乞へといふ意味です」

「天に向つて食を乞へとは」

「つまり自己が食ふだけのものを働けといふ事です、但し筆で働く原稿料でない、みづから鋤を執つて耕せといふ事です、それも此ごろ貴君方の諸輩で一の流行語に用ひらるゝやうな手ぬるい兒戲的の田園生活ちやア無効だ、すべて世の中の虚飾虚名を抛つて實際の土百性になれといふんだ、今日まづ文士直接の衣食住を求むる新聞雜誌その他の書肆は勿論、凡そ生活の要求に就いて人間を相手にせず、いはゆる天の賜物を飢ゑす凍えざる範圍内で急かす慌てず悠々として自由に氣樂に心配なく得よといふ意味だ、國を守る軍隊に屯田兵あるが如く、神聖を保つ理想界にも屯田文士を見たいもンですよ、常に口と筆の上では最も高く清く俗世間に超越しながら、

その事實は案外、この俗世間のために絶えず侮辱され迫害されて最も弱く脆く悲鳴をあぐるものは今日一般の文士先生だ、その外面の標榜を見れば癩に觸るほど生意氣に面憎く威張ッてるが、その裏面を實際に見れば涙が滾れるほど哀れで氣の毒で、いぢらしいもんだ」

「いや院長、その理論も講釋も聞くに及ばない、人間の職業には元來の體質問題が先決だ、加之も由來この文士には才子多病で蒲柳の質が多い、もし文士が土百姓に堪へないとすれば、どうなるンです」

「そこだ、そこですよ、才子多病といふが、そりやア間違ッてる、實は多病なるが故に神経が過敏になつて才子らしく見えるのだ、特殊の異例は格別、その證據は多病の才子に實際の大なる仕事を遺したものが尠い、また世間の通例、學者に蒲柳の質が多いといふのも、實は蒲柳の質なるが故に學問する奴が多いので、つまり健全の

思想は健全の體格にありといふ定義が動かさない説です、だから文學者も小説家も身體の弱い奴は無効だ、いつ何時でも實際に土百姓の出来る人間でなくツちやア文士になり得る資格がない、さらぬも脳味噌を絞り出して體質を弱くする文學だ、それを最初から瘦セツこけた蒼白い飢饉年の螳螂に等しい奴が一生懸命になつて堪るもんか、よし堪へるとしたところで、いはゞ苦しまぎれに出る半病人の寢言だ、加も此半病人が生存競争の激烈なる社會の中央で、自己の寢言を賣ッて其代價に中流以上の衣食住を得ようとは、あまり蟲が宜すぎる、とても出来ない相談だ、幸ひ貴君の如きは失禮ながら、露骨にいへば文士として大した名も聞かず、まだ深入して居られないやうだから、今のうちに思ひ切ッて他へ轉ずるが宜しい、もし今後なほ文士として世に立つ覺悟なら文士として市井の巷に餓死するの決心が必要だ、とても貴君の身體では土百姓になり得ない、土百姓になり得ない貴君として其まゝで

行けば、いくら勵んでも力めても到底、卑近なる俗世間の生活難に勝つ事は出来な
い、人間侮辱の極に壓殺さるゝ外はない、現在、今ですら、自己一人の下宿料に壓迫
されて手も足も出ないぢやアありませんか、これから一家を構へ妻子を持つて踏
出す世の中は下宿屋の催促よりも、よほど残酷に無遠慮に手厳しいモンですぜ、無
事に生命を保つのは今のうちだ、もし文學上に貢献せんとすれば、食ふだけの事を
他に求めて置いて、誠心誠意、何物にも煩はされず苦められず、つまり原稿料でバ
ンを得ない後、始めて高く清く大なる作物が出るかと考へますが、どうですな、文
學は賣買物でないといふ口の下から、すぐに本屋へ泣き付いて哀訴歎願的、原稿料
の前借するやうぢやア、なさけない、文士も食はずに生きて居れないが、せめて食
ふ道を半分ぐらゐる、原稿料以外に取る道がなくては不可ない、もし取る道がないと
すれば、これを強ひて嫌な俗世間に求めず、求めたところが得られないから今いふ

通り悠々と百姓するんだ、その百姓の出来ない奴は文學を捨てるが宜い、そもく
今日の青年が自己の頭腦も體質も顧みず叨りに文士を志すといふ事は、月賦年賦
に自殺するやうなモンだ、はゝゝゝ」

文士雲峯が大島院長のため土百姓の一點張に驚いて、あはれや何の要領も得ず其まゝ
遁け出せし後へ、入れ替りてテーブルを中間に相對ひしは副院長の塚原要藏と藝妓の
小冬、年齢は聊か女の春を過ぎし三十前後ながら、もはや浮世の裏も表も自由自在に
通りぬけて、寧ろ花よりは一入の風情を添へし青葉がくれの色香、くつきりと沓え渡
りしのみか、あふるゝ自然の愛敬には鬼でも蛇でも手鞠に取ッて來たらしい場數女、
藝妓も藝妓、たゞの藝妓でなく、いはゞ人殺しの罪深く出來たる藝妓なり、
「初めて、お目にかゝりますますが先生、どうか宜しく、お願ひ申します」

「やア、これは大敵だ」

「おや、大敵は酷う御坐います事、何も先生、わざと出来ない御無理を願ひに出たンぢやア御坐いませンよ、高が数の知れた藝妓風情ですもの」

「さア、その藝妓だから大敵だ、加之も生若い白粉臭い、初心めいた駈出しの端た藝妓でもあれば兎も角、見たところは浮世の灰汁がぬけた洗ひ出しで、たゞの藝妓でないらしい、一見どうしても千軍萬馬の古兵だ、なか／＼ちよいと手輕に數が知れないよ、うかく／＼すると此方が療治されさうだ、危険々々、はゝゝゝ」

「あら、先生、随分お人が悪い事ね、第一また妾どもに對しての御言葉が、あまり上手過ぎますよ、もし妾が尋常の藝妓でないと仰しやれば先生、貴君も尋常の先生で御坐いますまい」

「いや、たゞの鼠だ」

「たゞの鼠か、鼠でないか存じませンが段々と世の中が際どく逆さまになつて來て、うツかり此ごろ猫は油斷が出来ませンよ、二十日鼠か舞鼠のやうな優しい、かはいらしい顔をした方が貴君、怖ろしいぢやありませんか、どら猫を餌食になさるンですもの、ほゝゝゝ」

「おい、おい、ふざけちやア困るよ、こゝは病院だ、まして暢氣な待合でも料理屋でもない、最も眞面目に人生の煩悶苦惱を引受ける病院だ、なるべく藝妓氣質の洒落をヌキにして貰ひたい、寧ろ野暮の方が宜い」

「ですがね先生、貴君だつて、あまり眞面目に野暮な方ぢやア御坐いませンよ、たゞの鼠でない、なんかと仰しやるンですもの、つい調子に釣り込まれて、洒落たくなりますよ、ほゝゝゝ」

「いや、相手が悪いからだ、ぢやア改めて接します、不肖ながら院長の代理に出た塚

原といふものです」

「妾は賤しい藝妓稼業を致して居ります小冬と申します女で、あら何だか急に變です事ね、初めて今日お目にか、ツタンですが先生、どうも貴君は御馴染のやうな氣が致しますよ、どツかで先生、妾を御存じでせう、きツと御見受け申した方に違ひない、塚原さん、はてね」

「それが不可ない、さういふ餘計な事は、どうでも宜いから、第一まづ今日こゝへ来た理由を述べなさい、藝妓と煩悶病院、實に面白い對照だ」

「先生、何が面白いモンですか、世間の表面を笑ツて通る藝妓だツて、人の知らない内證には辛い、悲しい事が御坐いますよ」

「や、そろく、眞面目になツて來たらしいね」

「眞面目になると先生、案外沈み過ぎて、素人衆より浮かないモンですよ」

浮世の酸いも甘いも舐め盡せし三十藝妓の小冬、俄に案外の眞面目となりて寧ろ正直に野暮堅く言葉を慎みながら、しんみりと語り出せば、さて何處やらに垢を流しぬいた素肌の一本調子、をりく、拗ねて唐突の氣焰を吐きぬ、

「ねエ先生、此ごろ身分のある方々が、妾どもの事を、たゞ一口に嚙んで吐き出して、醜業婦と仰しやるさうですが、藝妓といふものは全體、賤しい家業は賤しい家業にしろ、それほど世の中に邪魔になる、あツて用のない、人間の屑でせうか」

塚原副院長、おもはず眉を蹙めながら、靜に腕を組み始めぬ、

「大變な議論を持ち出したね」

「別に議論ぢやア御坐いません、お伺ひ申すですよ、勿論、昔と違ツて妾どもの方にも、そりやア先生、随分お話にならない厄介な代物は多う御坐いますがね、それが多いからツて、たゞ一口に先生、醜業婦は、あまり御自分勝手に人を踏み付けた

酷い御言葉かと思ひますよ、價の割合に品の下ツたのは強ち藝妓に限らず世間體を第一の當世風、いづれ様でも御同様に根を洗へば化の皮を丸裸に剥ぎ取ツて、さのみ立派な御人體ばかり揃ツちやア居ませんからね」

「いや、眞實だ、今日の社會いづれの方面にも、その内容を探れば醜の字の潜んで居らない場所は無からう、紳士縉商といはれ貴夫人令嬢といはれ、乃至また慈善事業の下には寧ろ却ツて罪の深い、外面に現はれない見苦しい事が多いやうだ、いかにも藝妓ばかりが醜業でない、しかし一體に當今の藝妓なるもの、實に甚だしく下落したねエ、も少し何とかして、その估券を保てないだらうか」

「下落した事は下落しましたが、實のところ先生、わざと藝妓の方から估券を下けたンでも御坐いませんよ、たゞさへ賤しく扱はれる家業ですもの、すき好んで誰が自分の價を落すモンですか、失禮ながら今日の相場は、お客様の方から無理に引下し

たんです、客を相手の藝妓が先生、いくら高く止ツて居ても無効です、つまり客で安もの買の當世、藝ばかりぢやアお齒に合ひませんから、自然と藝のない色の賣物が繁昌する理由でせう」

「なるほど、さういへば實際、大に其邊があるらしいね」

「あるらしいぢや御坐いませんよ、現在たしかに、それです、第一また妾どもを人間の仲間へ入れて下さらないで、汚らはしく醜業婦々々と先生、目の仇敵のやうに仰しやるのは殿方よりも女の方に多いやうです、勿論、殿方は假令、どんな立派な眞面目な物堅い御身分でも、實は内々、あまり妾どもに對して、さう大きな御口の聞けない事が御坐いますからね、ほゝゝゝ、つまり奥さん方の目から見ると、いかにも先生、こりやア御無理のないところ憎まれるのが當然で、うかくなさとと大事の旦那様を、盗む氣はなくとも家業がら、ついね、そツと此方へ來て戴くや

う、お招き申すんですから、しかし先生、どこまでも奥様らしい奥様に怨まれるのは覺悟の前で、一句もない理由ですが、さて當節の奥様に案外、油斷のならない方が御坐いますよ、實は妾どもより、腕の凄い身持の悪い性質の下卑た、それこそ大變な奥様が在らっしゃるんですからねエ、實は開いた口が塞がりませんよ、どうです先生、わざと妾どもに御自分の旦那様を釣り出させて置いて、その御不在中に俳優なんかを引入れるといふ大膽な奥様のある世の中です、これまでの俳優は藝妓を情婦に持ったモンですが、當今の俳優は貴婦人といはれる方の御機嫌を取らないものは無いさうです」

「は、は、は、よほど癩に觸ると見えて、手厳しい八當りだね」

「なアに先生、これぢやアまだ立關口で、幾何か自分の身を顧みて遠慮してるんですよ、いよくこれから奥の樂屋を素破抜いて見ませう」

藝妓の氣焰萬丈、癩癩玉の八當りに中てられて、流石の塚原副院長、おもはず兩手を宙に浮しながら頻りに押伏せぬ、

「おい、おい、さう露骨に手厳しく跳ね出しちやア困る、も少し穩和に、あまり無遠慮過ぎるよ」

「だって先生、癩に觸りますよ、妾が承知しても、考へて下さい先生、蟲が承知しませんよ」

「いくら癩に觸っても仕方がない、世間に對して弱みのある愛敬家業ぢやアないか」
「仕方がないと仰しやれば、豆腐が堅くツて石が軟和でも通る世の中、仕方ア御坐いませんが、實は人様に大口の聞けない弱い家業ですから先生、今日まで堪忍して来た妾どもですよ、しかし此ごろのやうに明けても暮れても醜業婦々々と、頭から人間の仲間外れに扱はれちやア先生、いくら御無理御道理を虎の巻の藝妓風情だッ

て、さうは堪忍がしきれませんよ、どこの馬の骨か牛の骨かと仰しやるかア知れませんが、人の子は雪の日の樽拾ひばかりぢやアありませんからね、加之も馬の骨だツて牛の骨だツて用に立つ今日、使ひ道に依れば立派な細工になりますもの、生意氣に出過ぎた事をいふやうですが、もし待合と藝妓がなければ先生、公然より裏面に秘密の多い當節がらの銀行も會社も政治屋さんも大變な御不自由なさいますよ、白晝の中央を馬車や自動車で、どんな眞面目な顔して在らしツても、内實はね、ほほ、失禮ながら笑ひたくなりまさアね、それで彼は汚らはしい醜業婦だとは、よくまア先生、平氣に、口から出たもんですなエ、この分では灰吹から蛇が出たり瓢箪から駒の出るぐらゐは當然ですよ、第一また其紳士方に連れ添ツてる奥様風が凄まじい、あゝいふものに良人お手を觸れては御身分に關りますの、いや御體面が潰れますのと、さも白々しう仰しやるだけに、猶更ら妾どもの目で、その奥様の正

體が見え透いて堪りません、令夫人だツて奥様だツて先生、まさか雲の上から人間界に天降ツた方ばかりぢやないんでせうね、随分お里の知れない、ねエ先生、もし妾どもを醜業婦にするなら、するだけの事を先様でして、戴きたいんですよ、殿方に限らず御婦人に限らず總體此節の方々は、無價で威張るから、癩ですよ、豪い方なら豪い方のやうに萬事、豪いところがあつて充分、妾どもに得心さした上、なるほどといふ威張方をして貰ひたいもんです、馬鹿々々しい、する事もしないで誰が承知しますものか、さうぢやアありませんか先生、どう思召す」

「は、ま、まるで乃公が窘められてるんだな、その不足を當院へ持つて來られぢやア困る、聊か射る矢的的が違ツてるだらう」

「違ツても違はなくツても宜いぢやアありませんか先生、あきらめて堪忍なさい、どうせ弦を放れた以上、矢面に立ツた御災難ですよ」

「いや、災難も宜いが、全體こゝへ何しに來たんだ、こゝは煩悶病院だぜ、自己の一人身上に關する煩悶は如何なる煩悶も引受ける、但し他に對する癩癩玉は受取らないよ」

「あら、先生、すまない事、うツかり致して居りましたよ、實は自分の身に就いて泣くにも泣かれない事で伺つたんですが、ついね最初の出やうが、變に妙な言葉の行掛上、かうなつた理由ですよ、ぢやア御免を蒙つて、あらためて、これから自分の事だけ申し上げます、なぜ妾は、こんな餘計な、お饒舌に生れたんでせう、だが先生、あれだけの前口上を置かないと、きまりが悪くツて自分の事を打ち明けられない性質ですから、つまり内氣なんでせうね」

「はゝゝゝ、いかにも優しい内氣な女に生れてるよ、はゝゝゝ」
氣も心も一本調子の俠肌、どこまでも藝妓氣質に出來たる女、四邊かまはず自己が胸

にあるだけの癩癩玉を弾き出せば、案外また俄に打沈みて眞面目の物語、

「ねエ先生、いつも古い文句ですが、藝が身を助ける不幸とは、よく穿つた言葉ですねエ」

塚原副院長もまた眞面目の應對振り、

「なアに不幸ではない、身を助ける藝があればこそ、さうして無事に居られるんだ、藝のため自分の落魄を救はれるほどの人間に、もし藝が無けりやアどうする、現在その身を藝に助けられて居ながら、その藝に不足をいふ奴があるもんか」

「だって先生、なまなか藝があるから藝妓になるんですよ、もし藝が無けりやア破鍋に閉蓋、どうか斯うか身分相應の亭主を持つて、最初から堅氣の素人で通せませすもの」

「なゝア、やはり藝妓より素人の方が元來の希望かね、それぢやア問題の根柢が違ッ

てる、いかにも神妙な料簡だ、しかし素人になりたければ、いくら藝があつても本人の心得次第で、すぐ素人になれるよ、なれないといふのは事實なれないんでない、ならないんだ、今が今、すぐにも廢せるぢやアないか」

「ところが先生、これでも人の一代、さう團子細工のやうに手軽に行きませんよ」

「どうして」

「どうしてって、さうでせう、藝妓を廢めれば素人ですが、今更この妾が素人になつて、どこに貰ひ手がありますものかね」

「あるともさ、大ありだ、無理工面の大金を掛けてさへ請出す奴の多い藝妓だらう、それが無價で嫁に行くといへば天下の馬鹿野郎、雲霞の如く争つて來るぜ、は、は、は、は、は」

「戲談ぢやアありませんよ先生、大金を出して請出す藝妓は藝妓でも、そりやア當世

風の年の若い面の美しい流行ツ妓の事ですよ、お座敷でこそ二十九か三十に通して居ますが、實は先生、今年三十六になりますぜ、いくら氣が張つて居ても叶はない邊がありますよ、面影の變らで歳の積れかし、もう貴君、色も香もない時候後れで、枝も幹も春に去られて仕舞ツた婆アを、誰が喜んでくれますものかね」

「は、は、は、先刻の勢ひにも似合はず、急に弱くなつたね、さう氣を落したもんでない、三十が四十でも女は女だ、なるほど色香は失せたかも知れないが、まだ枯木といふぢやアなし、加之も全盛を極めた妓流の果は、寧ろ一の名物として歡迎する人があるよ、全體、どういふ男が目的だ」

「さア、そこですよ先生、いくら歡迎されても相手に依りけりて、今この妾を喜んで、すぐ引受けてくれるやうな人は、實のところ、妾の方で少々、進みませんからね、なるは嫌なり思ふは成らず、ま、ならぬ浮世、どうしたら宜いでせう先生」

「おい、ちよつと待った、また談話が變になつて来たよ、ふしぎに岐路へ外れて、捉捕どころがないやうだ、これぢやア困る、餘の事は暫く俵置いて、つまり藝妓の小冬なるものが當院へ来た第一の要點だけを聞かう」

言葉の花のみ多くて實の少きは女の常、わけて人馴れし藝妓の場數女、あまり愛敬過ぎて更に要領を得ざれば、流石の塚原副院長も殆ど持て餘しぬ、

「家業が家業だから自然の習慣上、どうしても言葉に綾があり過ぎて困る、つまり談話が上手過ぎるよ」

「ほ、ほ、譽められて叱られる理由ですね、ぢやア先生、かうして戴きませう、先生の方から妾へなるべく、無駄のないやう、いちく問うて下さい、妾の方では問はれた事だけ眞面目に、お答へいたしますから」

「なるほど、それが宜い、まづ第一、どこの生れだ」

「あら、まア酷い事、どこツて先生、そんな事を問はれて、少々嬉しくありませんよ、これでも種は本場の交りツ氣なし、女でこそあれ、憚りながら生ッ粹の江戸ッ子でさアね」

「そ、それが不可ない、萬事さういふ工合に出るから、つい餘計な口を聞きたくなるんだ、東京なら東京と、たゞ一言で済む筈だ」

「ぢやア東京、これで先生、よう御坐いますか」

「親は何をした人だね」

「阿父は大工の棟梁で、阿母は先生、やはり妾と同じ事、どうしても瓜の蔓に茄子は生りませぬね」

「また始めるよ、簡單々々、ところで幾歳から藝妓になつた」

「さうですなエ、大體、阿父が大變な放蕩もんで、さんざ阿母に入れ揚げましたから、

随分と世間に幅の利いた株も家も身代も無くして、妾が十一の時、そのころ柳橋で全盛の藝妓家へ下地ツ子で遣られました。十四の春お酌に出て、まづ人にも負けず相應の流行ツ妓になり始めたのは、たしか十八九の頃でせう」

「ことし三十六といへば、十四として殆ど二十餘年間だね」

「その二十餘年の間は先生、まるで夢のやうに過しましたよ、しかし夢ながらも無事に今日まで通して来た妾の身一人でお客の数は幾何、どれほどの家庫を潰しましたらう、たゞ馴染のお客ばかりでなく、その間に五度も請出された旦那が五人とも先生、生死の末が分らなくなつて、立派な大家の影も形も無いといふ始末、思へば冥加の悪い家業、罪の深い身體です。ねエ、よくまあ殺されもせず濟んで来た事ですよ」

「いや、どんな夢を見て来たか知らないが、過去は過去に葬つて仕舞つて、現在の小冬なるもの、そもく今日、まだ依然たる藝妓として當院へ来た要點は何だ」

「實は先生、口でこそ相變らず太平樂を並べて居りますもんの、このごろ何だか急に氣が弱くなりました。第一この藝妓家業が頻りと厭になりました、長の歲月、今までして来た業を考へると猶更の事、をりく自分で自分の身を責められるやうな心持になつて堪りませんから、もし外に何か妾に叶つた相應の商賣でもあれば、教へて戴きたいと、それを伺ひにまるつたんですよ、どうでせう先生、さんざ贅澤のあらん限りを仕盡して来た身體ですから、もう貴方この上の贅澤を望みません、たゞ人様の御厄介にならず食ふ道さへあれば、ありがたく神妙に守つて行く決心です」

「めぐる因果の小車とでもいふんだらう、そろく年貢納めの時が来たらしいねエ」

塚原副院長、今までの態度を一變して、俄に言葉を改めぬ、

「科學的の今日には用ひられない事で聊か抹香臭い説法のやうだが、實際、この人間

には争へない自然の因果應報といふものがあるよ、いくら家業でも女郎屋とか料理屋とか待合とか、その他の所謂不生産的に屬する客商賣、つまり衣食住以外に於ける贅澤の家業で殆ど無事に三代の繁昌を續けた凡例がない、もしあれば必ず家の看板だけで十中の八九、内容は主人の變つてるもんだ、藝妓家業また同じ事で、無論、來る客の方に罪はあるか、相手の身代が潰れるばかりで納まらない、その罪の差引勘定、どうしても足りないところは此方へ報つて來るよ、まづ第一の證據は、不思議に全盛を極めた藝妓ほど猶更ら老後が善くないからねエ、これが物の冥加に盡きるとでもいふんだらう」

確實ですよ先生、さうでなくつても此ごろ急に弱くなつて、さうざ自分のして來た事に寢覺の悪いところへ、さういふ事を考へると、ますます陰に閉ぢられて、何だか妙に氣が減入るやうです、だから先生、妾も冥加の盡き切らない今のうち、この

家業を廢めたくつて伺つたんですよ」

「それに付いてだ、まづ世間普通、玉の輿に乗り込む運がなくて、藝妓の出世といへば、寧ろ目的といへば、凡そ料理屋か待合の女將になるところだが、儲その料理屋なり待合が今いふ通りだからね」

「ぢやア先生、何をしたら宜う御坐いませう」

「さうだね、今更ら急に飲炊も子守も出來まいし、さりとて此方の思ふやうに亭主も持てず産婆にも看護婦にもなれまいから、いくら外に種々する事があつても出來ない相談は無効だ、鯛の腐つたのは肥料になるが、そろく四十に手の届きかけた藝妓の捨どころ、こりア聊か困りもんだね」

「鯛の腐つたのとは酷い事、これでも先生、一時は小冬と唄はれた女です、せめて鯛の腐つたぐらゐに見て下さいなねエ」

「は、は、は、はでは腐ッても鯛と口で、儲その腐り鯛だ」

「この腐り鯛を、どう致しませう」

「やはり外に仕方がないから、馴れた業に違くない縁の近い事で、どうだらう、遊藝の師匠にでもなッちやア、無論、堅氣の町内へ這入ッて初志の娘ッ子を弟子に取るんだぜ、差當ッて外に相當の納まりは無からう、そのうち何處かの樂隠居で、俗にいふ茶喫友達、世話する人があれば浮世を捨てた氣で、おとなしく世話になるが宜い、恰度こゝが早く無く遅く無く運命の境目で、その身の極め時だ、人間萬事、今一息といふ邊で退けば見苦しい終焉を取らない、この上に娑婆ッ氣を出して、をかしく變に若やいぢやア、ろくな事がないよ、つまり小町の成れの果だ、行末たとひ少々ぐらゐの苦痛があるにしろ、さんざ今まで取越して來た贅澤と平均して見りやア、さのみ生涯に不足のいへない身體だらう」

「なるほど、さう承れば、さうですなエ先生、自然の引潮に逆らッて見たところでもう此年輩ですもの、うまく泳げる筈がないんですから」

「そこだ、その點に氣が付けば、まさか襦袢も下けまい、名物の落ちた末は却ッて無慙なもんだ、花は昔に皺くちやの梅干婆アが北風の門三味線に水鼻を垂らして歩くといふ、ものゝ哀れは實際、よく世間にあるこつた、英雄回首是神仙と稱せらるゝ英雄豪傑でさへ、その首の回らし時が悪いと奈何せん、竟に名もない雑兵雜武者のため蹂躪られる例が世の中に多いぜ、まして高が藝妓だ、うかくすると路傍に倒れて區役所の假埋葬になり兼ねない、御用心々々々」

「ありがたう御座います先生、段々と承ッて、いよくその氣になりました、さう極めた以上は、少々の借金はあッても幸ひ入らない雜物を賣り放せば、まだ何か身に残るくらゐですから、まづ人様に不義理もせず済ませよう、どうしても今の中

ですねエ」

「今だ、今その決心を、いや決心と共に實行しなければ不可ない、けふ始めて逢ったばかりだか、今日こゝに謹んで小冬姐さんの勇退を祝します」

吉田大嶺といふ三號活字の名刺一枚を、テーブルの上、自己が片手の指頭に押へながら大島院長の面前に差出して、ひよろりと脊の背の高い瘦形の身を、さも重々しく仔細らしく無言のまゝ椅子に腰を下せし男あり、

あるか無きかの薄赤き八字髯を突兀たる鳶鼻の下に生して、蒼黒き頬骨の飛び出た顔面に猶更ら輝く金縁の目鏡越、絹は絹なれど羽織も衣類も何とやら絲目の弱りし不揃ひの着流しに年輩三十五六、

大島院長は名刺と本人の顔を五分五分に見分けながら、例のブラシ髯を逆に撫で初め

ぬ、

「吉田さんは兎に角、この大嶺といふのは、お名前ですか」

「雅號です」

「は、ア、雅號といへば、やはり何か風流韻事で、世俗の外に身を置かるゝ御境遇ですな」

「さやう、小説家です」

「小説家、や、實は過日も、雲峰とかいふ人に」

「その雲峰は僕の門下です、つまり雲峰に聞いて來たのですが、院長は大變我々文士に對して卓越なる御議論を吐かれるさうですな、は、は、は、とところで僕も亦、今日の日曜を幸ひ、その名説を伺ひに來ましたよ、但し土百姓の一點張は既に雲峰より委しく聞きましたから、重ねて二度の御説法を乞ふに及ばない、どうか鋤鋤の外に於

て身分相應我々の取るべきものを拜聴いたしたいのですな、兎角この文士連中は、御承知の通り、世間の狭いもので、さッぱり筆の外に得るところがありませんよ、は、は、は、は、

實は自己が門下生の吹き飛ばされたる復讐的に、をりくをかしくもない器械的の笑ひ聲を發して殆んど嘲弄的の口吻、ふしぎに悉く的の字を帯びぬ、

「如何です院長、これぢやアあまり露骨ですか」

大島院長、靜に腕を組んで大嶺の顔を、じろりと打守りぬ、

「なるほど、流石に文士は文士、違つたものですね、總體この人間は他の事が見えても自分の事が見えない筈だ、しかし今、現在、貴方が貴方を知るの明に驚きましたよ、一點さらに虚偽のない立派な自白だ、いかにも小説家は世間が狭くつて、さッぱり筆の外に取得がありませんねエ、いや、實は狭いのでない知らないんでせう、

取得がないではなく、わからないんでせう、實際また世間の事が隅から隅まで廣く行き渡つて、いつ何時その筆を投じても自由自在にこの複雑なる社會に悠然と起てる程の人間があれば、寧ろ却つて、あゝは盲目滅法の大膽に書けますまい、わからないで出来る藝だ、つまり嬰兒の惡戯と同じ理由だ、罪がない、これを天真爛漫といふのですな、は、は、は、は、

さくや否、大嶺先生、によきりと棒を呑んだる如く、椅子を離れて起ち上りながら顔色を變へぬ、

「院長、る、院長」

大島院長、ますく沈着の態度、

「まアお掛けなさい、生理的の自然よりも精神的の作用で生きて居られる貴君のやうな體質の人が、さう急に激しては宜しくない、甚だ危険だ」

實は一息に吹き飛ばされたる門下生の腹癥せに襲ひ來りし吉田大嶺、軽く大島院長を
持ち上げて翻弄せんとせしが、づつしりと案外に重きに面を皺めて尻餅を搗きぬ、
されど流石に雲峯よりは一二枚の上手、そのまゝ脆くは遁け出さず、わざと平氣に踏
み止つて出來合の苦笑

「生理的よりも精神上の作用で生きて居るとは、我々文士に對しては深刻なる冷笑を
與へられた意味かも知れないが、我々文士としては、實に感謝せざるを得ない言葉
です、いかにも我々は有形の肉體上よりも寧ろ無形の理想上に生きて居りますよ、
聊か他の動物と違つた點がありますからねえ、はゝゝゝゝ」

大島院長、ますく沈着の態度、

「いや、決して貴君方を冷笑したのではない、實は同情の極、あはれんだ理由です、
あまり單純に罪の無さ過ぎるところを氣の毒に思つたのです」

「いくら院長の方で、哀れな奴だ氣の毒な奴だと思つて下すつても、本人の我々は誠
心誠意、これを天職と心得て、人間無上の光榮に感ずるんですから、その御心配に
及びません、いはゆる他人の痲氣を頭痛に病むといふ事は、つまり其方の勝手で、
はゝゝゝ強ひて此方の願はないこつてすよ」

「なるほど、や、さういふ御決心なら別段、最初から問題に上さない事ですが、實に
此間の雲峯先生といひ今日また貴君と云ひ、わざく師弟前後の御來臨には、いつ
れ必ず何等か深い煩悶でもあつての事と思つたからですよ、ぢやア貴君は煩悶病院
に用のない方だ、つまり人間慘澹の裏面を引受ける當院に用のない人は幸福の生活
です、まづ露店の古道具でも冷かす調子で來られたんでせう」

「いや院長、まさか、さういふ理由でも無いです」

「無いとすれば、やはり貴君を患者の一人として見ますぜ」

「患者、どういふ患者と見ます」

「さやう、肺病人の死際に等しいやうなモンですわねエ」

「面白い、この吉田大嶺を肺病人の死際とは面白い、こりやア妙だ、いかにも御見立が振ツてる、御診察を願はう」

「實は診察するまでもない、もう無効です、いくら自分の氣ばかり確實なやうでも、到底、いけませんよ」

「は、ア、療治が出来ませんか」

「なアに出来ないのではない出来ても助からないんだ、徐ろに死を待つより外アありませんね。但し此病症ばかりは馬鹿も怜悯になるといふくらるで、死に近づくと猶更ら神経が過敏になるから困る、實際もう貴君も長くはありませんぜ、しかし折角の御依頼だ、とても効はないが、せめて病症の由来だけでもと説いて上げませう」

兎も角も吉田大嶺といふ名を文壇に聯ねて、これを人間無上の光榮とし天爵の頂上とせる身が、その光榮と天爵を肺病患者の死際に見立てられし面相も、はや憤怒の度を越えて半泣の冷笑を帯びぬ、

「院長、療治の出来る出来ないは別問題だ、また強ひて願はないが、そもくこの吉田大嶺を肺病患者の死際に等しいとは、全體どういふ醫學上から割り出されたか、その理論を聞かう」

大島院長、いよく眞面目に首肯きぬ、

「なアに理論でない、事實ですよ」

「その事實を承らう」

「その事實は現在、貴君が證明して居るぢやアありませんか」
「どう證明して居ます」

「どうツて、苦しいでせう」

「何が」

「病症そのものに犯されて、今や將に斃れんとしつゝある貴君がさ」

「いや院長、そこだ」

「どこです」

「こりやア、怪しからん苟くも文壇に於ける僕を嘲弄するンですな、今の一言は」

「は、は、さう曲解しては困る、苟くも文壇に於けるか於けないか、その點は門外漢として知りませんが、我面前に於ける貴君は確實に認めて居ります、その貴君が、そこだといふ言葉に對して、そこだと問ふたンですよ、もし意に觸れば御免を蒙ります、しかし洒々落落々として雅量のあるべき境遇に居らるゝ筈の貴君が、いちくかういふ小さい言葉尻を捉へて強く神経を刺戟せらるゝやうぢやア心細い、それが

即ち一の病的だ、加之も其病氣が、よほど重くなつて居ますぜ」

「いや、そことは、そこだ、そこに大なる見解の違つた點がある、つまり院長は僕を以て最も重き病人と見るが、見らるゝ本人の僕は決して、さらに病氣でない、ない證據は吉田大嶺、いまだ曾て自分に聊かの苦痛も感じませんよ、頗る健全です、遺憾なく達者です、寧ろ他よりは愉快に筆を執りつゝあるンです、貴族に生れず富豪に生れず其他一切の人爵と虚榮を避けて、この文壇の人となつた幸福を日夜、感謝して居るンですからねエ」

「なるほど、日夜、誰に感謝して居なさるンです」

「誰、誰に感謝するツて、つまり感謝して居るンです、感謝の念は強ち他に向ツて拂ふべきものに限りません、いはゞ我みづから我を誇りとして、自分が自分に感謝して居るンです」

「や、わかりました、これを高尚にいへば、自己が執る業を神聖として殆ど其道に殉ずると云ふ大自覺、いかにも立派な事になりますね、しかし、世の中は廣い、あまり我田に水を引き過ぎると溺れますよ、實際また一方からいへば、鼻持のならない手前味噌で、賣藥の效能書と一般、自畫自讚の甚だしいもんだ、所謂世間知らずの獨り自慢、井の底の蛙だ、わるくいへば糞壺の蛆蟲その醜を知らずで、對照的の批評では鷹も飛べば蚊も飛ぶの理で、同じ飛ぶ上にも大變な相違がある、は、は、は、つまり文士とか小説家とかいふ先生達の飛び工合が社會の平均上、どの邊まで飛べて居るか、その高さを實際の尺度に當て、見ませう」

最初に嘲弄的態度を示せし吉田大嶺、いつしか顔色を變へて四角張れば、最初に謹嚴なりし大島院長、今は却つて丸く洒落に打ち解けながら、テーブルの上に頼杖を突いて満面の微笑、

「や、どういふ工合だったか、妙な調子で、貴君へ對する言葉の上に聊か敬意を缺いたやうですが、今更急に改めて、は、は、は、お世辭もいへませんから、やはり行掛り上、暫時このまゝ御免を蒙りますよ、つまり露骨に無禮の繼續だ、は、は、は、」

「なアに、わざ／＼強ひて殊更らに心にもない敬意を拂つて貰ひたくありません、寧ろ一種の好奇心を以て、その無禮を面白く聞きませう」

「これは案外、さう俄に沈着いて雅量を示されると、少々うち出し兼ねるが、試みに今いふ世の中の尺度で、いはゆる今日の文士小説家として居らるゝ先生方を」

「遠慮なく量つて御覽なさい、頗る興味のある批評だ、その社會の尺度で我々は實際、どのくらゐの寸に當ります、平均どのくらゐの價値を世の中に占めて居ります」

「全體の程度を一尺と假定して置きませう」

「一尺、よろしい」

「その十分の一は即ち一寸ですな」

「一寸」

「いや十分の一は一寸ですが、その一寸の十分の一となれば」

「は、ア、一分といふんですか」

「まだく」

「ふむ、一分にも及ばないと、いふ理由ですかね」

「左様、ずつと思ひ切つて大まけにまけたところで、まづ一二厘の邊でせうなア」

「二尺の一二厘、つまり我々が世の中に於ける程度と分量の割合を百分の一か二に當るといふんですか」

「なるほど、世の中を一尺として、その一二厘は百分の一二に當りますね、こりやア大變だ、どんだ違算をしましたよ、大間違ひだ」

「でせう、であるべき筈だ、いかに理事を解せざる門外漢の尺度と雖も、まさか今日の我々に對して、は、は、は、社會に於ける其割合を百分の一二とは、あまり勘定違ひも甚だしい、は、は、は」

「や、何、間違ひは間違ひだが、さういふ意味に間違つたんでない、百分の一二に當ると聞いて實は驚いたのです、いくら最眞目に見ても今日の社會が貴君方に對して、その割合を百分の一二も與へてくれる道理がありませんよ、千分の一二すら覺束ない、悪くすると零ですよ、世の中の尺度に外れて居ますぜ、うすくすると存在を認めてくださいませんぜ」

吉田大嶺、豆鐵砲を喰ひし鳩の如く、もはや呆れて泣きもせず笑ひもせず、ぱちくと目ばかり剥き出しぬ、

俗世間の外にありといへば、高尚幽玄の極、いかにも神韻に近く聞ゆれど、この世の

中に存在を認められずといへば、侮辱嘲弄の極、油虫の死骸ほどにも扱はれぬ吉田大嶺、おもはず呆れて目を剥き出す真正面に、大島院長ますく、打ち解けたる満面の微笑、

「甚だ露骨過ぎて無禮な言を吐くやうですが、暫く手前味噌を取退けて虚心平氣で、まアお聞きなさい、凡そ物の價值は他に對する一般の比較上より打ち出さるゝもので、人間の實際は賣藥の效能書にあらざる以上、いくら威張ツても騒いでも御本人の吹聴ばかりぢやア世間が承知しませんよ、加之も社會は貴君方の專有物でない、貴君方に作られたものでないから到底、貴君方の自由にせらるゝ筈がない、案外この世の中は廣くて大きくて強いモンですよ」

「いや院長、そりやア大に見解が違ツてる、つまり産み出す根本的問題が違ツてる、そもく我々は一般の俗世間より輕重を量られて、その秤り目に上るべきものでな

い、お氣の毒だが院長は院長だけの頭腦だ、この清く尊き文學を以て通り一遍の八百屋に對する芋か茄子を買ふが如く見て居るらしい、加之も我々は此社會を自己の專有物にしたくもない、する必要もない、此人生を自己の天職に訴へて美化センとする者だ、光輝あらしめんとするものです」

「は、は、は、そこが鼻持のならない手前味噌で、さらに效能のない田舎賣藥と一般、ただ御本人の吹聴に止まるのみだ、は、は、は、いくら俗世間が癢に觸る文學者でも、まさか無人島では少々お困りでせう、口では兎も角も現在の事實上、やはり人類群居の此社會を脱する事が出来ずまい、出来ないとすれば此社會に載せられた一分子で、その社會なるものは常に遠慮なく忌憚なく貴君方の輕重を量ツて居ます、量る權利がありますよ、無人島は偕て置き、聞くならく今日の文學者先生達は自分の住居ですら天井の鼠に驚いて青くなるといふほどの臆病だから、とても夜半に墓原の

ひとり歩行も出来まい、第一また此俗世間を脱して仕舞ッては忽ち其日から貴君方は餓死だ、いくら書いても稼いでも原稿料が取れませんぜ、さらぬも瘦せッこけた文學者の乾物、あまり感心しませんねエ、かの首陽山に餓死した伯夷叔齊さへ川柳氏之を冷かして曰く、瘦せこけた死骸があると蘇取、しかし文學者の死骸は蘇取も探し出してはくれません、わるくすると犬も嗅がない、は、は、いや乃公は賣文の徒でない、と喝破されるかも知れないが、そりやア無効だ、どんな熱病の流行る時でも、さういふ勝手な熱は吹かさない、つまり貴君方の同人間に原稿料なしの無報酬で筆を執る人がありますか、もしあれば無報酬でない、その原稿料が取れないから、取れるまでの間は己むを得ず、當分まア自己の名を賣るためで實は苦しい半泣の執筆でせう、實際また貴君方の作物に定價幾何郵税幾何、甚だしいのは勸工場の賣出と一般、特別割引の廣告まで掲載しながら、どこに賣文の徒でない人がありますか、

而之も最初から版を重ねて置いて、僅五百か千部づつで第何版といふ白痴威喝の今日、文學は金錢の交換物でないが聞いて呆れる、いふ勿れ出版書肆の商略上と、その商略上に引放されて飯の喰へる人が居りますか、憐れむべし現實の状態は新聞雜誌への切賣に狂奔し本屋の番頭小僧に取入ッて一文でも値の宜い方へ原稿を荷ぎ込むといふ先生が多い、文士の人格も品位もあつたもんでない、時に賣れざるを以て高しとするは逆も貴君方の領分ぢやアありませんぜ、それは後世に知己を待つ一代傑出の文豪がいふこつた、その貴君方が此社會を俗だの厭だのとは、けしからん僭上の沙汰だ、この社會が貴君方を今日まで殺しもせず潰しもせず其まゝ無事に生かして置いてくれる慈善的の雅量に感謝しなさい、感謝して自分は自分だけの分相應に繭を作るべしだ、その繭の中で勝手次第に、どんな夢を見ても寢言を饒舌ツても差支ないが、生意氣に自己より外面へ向けて食み出しちやア不可ない、社會全

體の分量程度、いかなる邊で轉がツてるか我身一個の置場所さへ分らないくせに、この人生を美化させるとか、光輝あらしめるとか、は、は、は、もし他よりの比較を去ツて自己が執る業を神聖とすれば、ランプやホヤの破片を買ツて歩く賤しい職業にも其道に於ける神聖だ、もし高尚といへば坂の下の北風に吹かれて水鼻を垂れる立ン坊も、高尚の理窟はある、もし正直の點からいへば盜賊して監獄へ這入る奴が最も正直だ、兎角この文士とか小説家とかいふ先生達は絲目の切れた奴で、たゞ闇雲と自己ばかり有頂天に高く飛んで仕舞ツて、少しも地上の人間界を知らないから困る、加之も糸が切れて其日の風次第に方角も定めず、ふわ／＼と揚ツた先生だから、その風が無くなると大變だ、頗る危険だ、瀧壺へ落ちるか海の中へ墜ちるか汽車線路へ落ちるか、到底、ろくな場所へ納まらない、現に貴君の如きも名こそ吉田大嶺で、いかにも重々しく動かないやうだが、よほど軽々しう飛び揚ツた調子がある

りませ、飛び揚るも宜いが、なるべく地上の人間界に縁の絲の切れないやう注意なさい、は、は、は、」

吉田大嶺、無言のまゝ、啞のごとく椅子を離れて立てば、大島院長これを額越に見上げての目禮、

「さやうなら、お隙があれば御遠慮なく、また入らツしやい」

殆ど宮庭式の畫面を理想とせる日本在來の美人は、何の不幸ぞ生きた身體を箱入人形に等しく深窓に閉ぢ込められ、加之も世間體の壓迫と家族制度の人爲的を加へ過ぎし結果、内外より責め付けらるゝ苦し紛れに哀れや生理上の發達を損ねて、いつしか不自然の病的美人となりしもの多かりしが、近來はまた一足飛に不自然の反動力、あまり開けツ放しの我まゝ、三昧に育ちて、よろ／＼と野生の蔓に等しく手當り次第に

伸び過ぎし結果、いたるところに搦み付いて今更始末に終へぬ事となりぬ、箱詰の病的美人こゝに一變して野放しの放縱的美人となり、その野生中より更に生理上の發達をし過ぎたるもの、これを衛生的美人といふ、

いはゆる衛生的美人とは、日本固有の纖弱き不自然的に對する語にして、その美人の稱は元來の美なるがためにあらず、たゞ女を嬉しからせる當座の愛敬お世辭に過ぎず、實は遺憾なく膨れ上りて骨格逞しき大女、ぶツても叩いても急に死にさうもない女の事なり、

この遺憾なき生理上の發達美人、即ち衛生的美人の標本ともいふべき女、年輩二十一二の勢ひ猛なる眞ツ盛り、もとより當世ハイカラの大廂、さらぬも短かき猪首を鳥の毛に埋めて、わざと澄し込みし其顔を見れば、鼻の低きにあらず目の細きにあらず額の突き出たるにあらず、あくまで彈力を帯びし皮肉の無遠慮に張り出したるがための

み、汽笛に等しく四邊かまはぬ黄色の聲を放ちて、その名を星野露子とは、案外に優し過ぎたり、

これに對ひしは副院長の塚原要藏、じろりと一目みるや否、聊か恐れを抱いて反身になりしが、今更ら遁け出されもせず其まゝ度胸を据ゑて椅子に倚りぬ、

「は、ア星野、露子さん、いかにも優美な御名前ですな、星と露、その對照が既に一の美文を或して居ますね、お年齢は、なるほど、二十一、まだ只今いづれかの學校ですか、それとも業を卒へて専ら家庭に居られますか、第一この煩悶病院へ來られた主意を簡單に承りませう」

皮一重を張り切るばかりに遺憾なく生理上の發達を遂げて、いかなる血氣の荒男と組んでも容易に負けぬ體格、いはゆる衛生的美人の標本に出來たる星野露子、心の珠玉は兎も角、まん丸の両手に輝くダイヤモンドの指環、これすら實に眞偽いまだ定まら

ぬ怪しけの光りを、わざとテーブルの上に突き出しながら、掻き亂せる如き廂髪の下より豆粒のやうなる目元、さらに一點の愛敬もなけれど、本人の氣では世間あらゆる男に對して一種の魔力を備へし料簡なり、

「失禮ながら貴君は、院長さんで在らっしゃいますか」
切口上に念を押されて、塚原副院長いよく恐れ入りぬ、

「いや、院長の大島ではありませんが順番の都合上、御不満でも致方がない副院長の塚原といふ者です、是非、院長とあれば二時間ばかり、お待ち下さい、しかし一應いづれにせよ御來院の主意を承りませう」

「あら、どちらでも結構ですが、ちよいと只お伺ひ申したんですよ」

「それは御丁寧な事です、は、は、は、時に貴女は、まだ御獨身ですか」

「まだ、まだは酷い事、さう嫁期を過ぎた女に見えませうか」

「は、は、は、決して其、さういふ意味ではありません、ぢやアお嬢様です、つまり婦人の生涯に再び顧みて得べからざる大切の時期で最も清く尊き美の極點、いはゆる純潔の處女で在らっしゃるんですな」

「大變な御解釋の入ります事、どうお答へ致しませう、は、は、は、」

「なアに別段、解釋を入れた理由ではありませんがね、御承知の通り時計でも指輪でも薄ッぺらな金着せの天ふら物が流行る世の中だ、兎角この頃の、お嬢様様には油斷がならない、案外の大膽不敵、うっかりすると危険千萬、とんだ處女のイカサマに出ツ喰はすさうですから、玉石混合の恐れを避けて、わざと殊更ら貴女に敬意を表した所以ですよ、は、は、は、」

「ますくむづかしくなります事ねエ、は、は、は、」

「いや、これぐらゐの慎重の態度で伺つても、どうかすると、やられますよ、は、は、は、」

さて貴女を清浄無垢の純潔なるお嬢様として、御両親は」

「父は御坐いません、たゞ母と今年十三歳になる弟のみで」

「なるほど、お家の御職業は」

「父は相當の官吏でしたが、死後、別に何も致しません、幸ひ父が多少の財産を遺してくれましたから、まづそれで」

「は、ア、お父様は既に歿しられて、おツ母さんと十三の弟さん、なか／＼貴女は世間普通の嬢様方より責任の重い身ですな、加之も二十一といへば猶更の事ですな、その貴女がこの煩悶病院へ、どういふ理由の下に來られました」

塚原副院長、つらく／＼星野露子を打守りて、俄に小首を傾け始めぬ、

「古い諺ですが、物まづ腐りて虫を生ずるの理で、生理上の發達に根本を置かれてある人間は猶更の事、その身體に何等かの異状があつて後、自然に氣の鬱いだ顔の

色の悪い虚弱な貧血性の人に頭腦の病的を帯びるモンですが、どこに一點の申分もない血色といひ皮肉といひ實に遺憾なく發達して居らるゝ貴女のやうな體格の立派な御婦人に、苟も、煩悶とか悲觀とかいふ陰鬱性の宿るべき筈がない、その貴女が今日、わざわざ當院へ來られたのは全體、いかなる理由ですか、なるべく枝葉に渡らず簡単に承りませう、父の遺産があるといはるゝ以上、まさか差迫つた生活難ぢやアありませんまい、まだ良人を持たない身として涙あるべき筈がない、おツ母さんと弟さんと母子三人、いはゆる水入らずの單純な家庭に常識の缺けない以上、これとて圓滿を損ずる程の悲惨はありませんまい、どうしても、いづれの點より見ても、まづ貴女と煩悶病院は直接の縁が遠いやうですな」

但し戀ですかといふべきところを、わざと口に出さず奥齒に噛み殺して問へば、星野露子、何とやら不足らしく恨めしげに顔色を現はしながら、流石に差俯いて小さき聲、

「生活難も、家庭にも別段、煩悶は致しません。まだ良人を持たない身に妻としての涙あるべき筈がないといふ其涙を妾、まだ定めぬ良人の爲に」

「はてね、不幸にして、もし配遇を誤れば生涯の悲劇、その時に始めて湧き出づべき涙を、まだ人の妻にもならない獨身の貴女として、何故その涙が今から出るんです、世間普通の人情、理想の良人を描く處女の常としては寧ろ楽しく嬉しく、日夜たゞ前途の希望に満されて居る筈ですが」

「その希望が、叶はないからです」

「は、ア、わかりました、その希望が叶はないための涙といへば、もはや理想でなく空想でなく既に現在、その希望とする未來の良人が定まって居るんですね、定まって居ながら、貴女の定めた通りにならないといふ煩悶でせう、つまり、涙の取越だ、露骨にいへば、貴女は本氣の沙汰でも先方の奴が、いや先方の方が案外、うはの空

で、さほどにも思つてくれないといふ御立腹の次第ぢやアありませんか、頗る卑近な言葉ですが世俗にいふ鮑の貝の片思ひ、ではありませんか、過不及なく相愛して成就すべき一の戀なるものに平均等分の數を缺いた理由でせう、ことし十三の弟さんは兎も角、それに付いて萬事お母さんは御存じですか、但し貴女ばかりで、いはゆる事後承諾になさるお覺悟ですか、その人の身分職業年齢、どういふ方ですか、第一また貴女は、たゞ意中の一人、希望の目的物、未來の良人と定めたのみですか、先方から何らか他日の條件となるべき確い約束があつたんですか、それとも相方が互の間に既に希望以上、約束以上の事實が實行された交情ですか」

息も次がせず疊みかけて、じろりと眞正面より星野露子の顔を打守りぬ、戀を神聖とすれば、人間美德の極、いづれの方面いかなる人に對うても大に誇をべき筈なれど世間普通の人情、その神聖を眞正面より剝出に問はれて平氣に答ふるものな

く、わけて處女に對する戀を發くは祕密の底を打ち割るに等しく、あまり無遠慮に過ぎたる残酷の所爲なれど、この無遠慮と残酷を全身に浴せかけても大丈夫と心得たる塚原副院長、實際また浴せられても身も驚かず顔を赤らめぬ星野露子、殆ど負けず劣らぬ勢ひ兩々相對して案外の露骨談となりぬ、

「星野さん、露子さん、實際まだ貴女は清く汚れざる神聖の處女ですか」

「ほ、ほ、妾、さう聞かれては困ります、ほ、ほ、ほ」

「いや、困る困らないは措置いて、まづ事實問題から始めます、つまり今いふ未來の良人なるものに對して貴女のため三段に分ちませう、第一は只これ意中の人ですか、第二は相方お互に約束でも出來てるンですか、第三は、もはや既に肉體上の關係を遂げて居られるンですか、いづれにせよ當院は貴女に不利益を醸すところでないから、ありのまま、お聞き申したい」

「實は、妾、その三段とも」

「は、ア、三段とも嬉しく楽しく順序よく遂行せられたンです、さうでせう、さうあるべき筈です、たゞ空しく意中の人に止めて未だ先方に通ぜざる戀のため煩悶するやうな貴方でないと見ましたよ、は、は、は、貴方に限らず當時は皆その流です、手應のない片思ひのため夢うつ、一室に閉ぢ籠つて半病人になるのは昔日の處女だ、今日の處女が男に對する戀は賣買の取引と一般、何等か既に確な事實上の關係がなければ戀の部に入れないやうですからねエ、は、は、は、處で貴女の戀人は目下、貴女に對して、どういふ態度です」

「内々は母も承知して居りますし、また先方の兩親も、うすく、知らない筈なく、いは、公然の祕密ですが、近ごろ本人の意志は疑はしい點が、無論まだ在學中ですが」「在學中、どこです學校は」